

誦誦

其角七部系

上

911.3

丰

上

戴冊

臨風

晉

序

てのうゝ負享元祿のちのちの集
七部をあつめて蕉門七部の集
といふをたゞはあつて運の比の
なつてあつてあつてあつて
うゝあつてあつてあつて
くちとなつてあつてあつて
論はあつてあつてあつて

あつた後、川の表、くちあつた上
蕉翁一世の变化あり、うは流り
乃先後をまじり、むらうあまは
ゆづり、入の上、うづ握、
と懸、むらう、うづ、
ま、ま、
具角、編集をえ、
七羽のゆき、
序ノ一

弘めむるを、
高賈、
切、
俳諧門、
お、
綴、
こ、
ち、
も、

不可收飛者以多之體我之勢之方不
議信相之方也如海派中有一
不生信臨臨臨臨臨臨臨臨臨臨
不常情也而其人謂其集但應取之
家也為春松朋之中之一也耳之集
臨臨之步風臣之及松而自外之見
之之之之也且其之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之

部之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之
之之之之之之之之之之之之之

五明七年未年一月

信信信信信信信信信信信信信



Blank page with faint vertical lines and minor stains.

何人書此

張

離貧和文此直今大

捐自回更進此直其

贈寺利聖賢本兩

題

如古人貧文并之贊也而

噓古人貧交行之詩吐而
戲序

翻手作雲覆手雨紛
俳句何須數世不見字
鑑貧時交此道今六棄
如土

風々世は拾ふぬる

晉其角撰

唐栗集

改正

礼者戯門也花明也
賤と春餅は萬の宿
初えはかりの床や鳥
先伴は大山おろや門の松
春柴負葩木海を山路先
餅ヲ焼て富を知れ此詩士
句ひのり今年廿五ノ翁
盤居やと辭めかた次致柳子
いそや基地なり小神のふと

三峯 王尺 殘詞 翠紅 藥堀 丈排 杉風 信德

月い文斜しあれ我意慕の如き守 友静
 釈迦遊る弥勤進まぬ國は云 春澄
 山松やうゝ此穀よりと然の春 千之
 古尺袴きく磨んゆりまづつ 千春
 春もに松い食らゝて年ふや ト尺
 春もに松い食らゝて年ふや 楊水
 春もに松い食らゝて年ふや 嵐蘭
 春もに松い食らゝて年ふや 嵐竹
 春もに松い食らゝて年ふや 北麴
 春もに松い食らゝて年ふや 楓興
 春もに松い食らゝて年ふや 守 守

餅の島に白蛇眠りけり 洗
 初礼や富士をかきて扇指 松風
 代ヲ様ス浪池は乃紫鈍 仙化
 民の戸や松は餅さく 柳興
 初なきやあけの池乃空セ極 喀山
 花アセ土言と味像園柄鼓 才九
 烟の中は春は春と 似春
 庭に人火く出見の世乃外渚
 天和三年試筆
 病さもある顔洲すく千く此客 其角
 力乃正月ヲ屈原が隣 嵐雪

屯より秋をさひしよ男より

藤白

其二

浦島をあやゆるや世乃より我

同

塩鯛ハ死ヲりつて祝ハミ

其角

芥吹く蓋ハ号乃うつりも此

出雪

其三

し羽春の奥

孫もあり
青もあり

傍ヲ富

同

杖より詠し梅のふけり

藤白

三線乃及第蝶の冠よりあ

其角

とくうす女声よりおつて奇

龍雪

芋室乃雪百やそより下より菜

言羅

公うとれううう蓋の早苗代露緑

杉風

情うるや都ハ雪乃よりあ菜

勝延

何故溪邊双ハ白鷺

无憂頭上亦垂糸

髪あけぬ雪芥より吹込込込

其角

小袖着せし休白ハ梅がつ月

同

追鳥や梅枝ハ息をよめけり

千春

うくすれよぶうあやの辭賣

翠紅

鶺鴒日ニ不浴白

鳥日ニ不黙黒

川鳥白くを浴せしめて白く
 瀬瀬くきぬひの佃魚白く
 浪ヲ焼く白魚星乃遠は浮
 雪を凍て白くを流せ冬菜川
 白魚を眺めぬを晴れ箱哉
 魚の昔汀乃傍の消え玉
 鰯括く釘乃角くじりへ
 芦のあやしく蝸牛カタツムリ角のがけ
 在原寺あり
 美男村乃柳をいしを泣せり
 今いしと涙を流し嬌柳
 楓奥 全琴 麋時 嵐朝 翠紅 心棘 黄吻 志水 鼓角

傷風女褌かきく柳
 眼君乃柳をきくを塘う
 柳をぬきあみ猫ヲ夜式
 むしはあ柳をねつる柱に
 川風夕日やすく吹つる網
 柳をいしを柳のきり夕燕
 傘をきくかきくやぬき
 被つる先舞く蓮乃小蓋
 声おきくがけのく白鷺
 行雁や兄のく妻のく登
 友の約れ筈やきく雪雀笛
 大淵 才也 木因 四友 菰白 嵐雪 其角 曉雲 羊角 在慈 野笛

女よかりりて

ちしも哀猫ふゆき焼てうらりり
愛あほる猫い傾婦の媚ヲ倭
意ちや猫こころとはお根山

鼠雪
才九
東順

不生不滅乃心哉

湖棠乃斬ヲ悟を祢えん像
豈立ヲ折てさるに早し温繁粥

其角
言水

寒食

木食を香炉に烟たえり日なり
寒食の日は人あふくに飽つん
寒食や竈下は猫乃目を怪しむ

鼓能
其角
上角

淋々貴妃のちやめさ紗月

四友

春雨偶興

春乃餅うひて遊戯の秋と誰
鳥賊の月り反ておも乃鏡る

其流
工迪

三陽

醜ノ挑裏の詩人盤白

其角

菊ヲ白く山吹乃粥
榮泉の蛙小判は牙をよそて

李下
柳與

其二

けろ背子土圭此みは花うろ

同

さく波うろろ蝶乃釣竿

其角

凡心扇つゝ免やうあふらん

李下

其三

僧乃謂うとは庐山乃桃の時

同

巖を筆を握ルつきく

柳奥

まふみんとも敵は囚われ

其角

雛ヲ抱てくくくの桃を繋りつ

其流

曾月乃おれかぐさや夜遊一雛

友白

桃園乃猫うひさきひを車

彦豪

ひをさきき放意のくく乱しぬ

松島

雛乃の桃壺の腋をさとりて

春白

龍田娘々めけん雛乃かき綿

子堂

雛九うま湯や桃のお不老園

羊角

以干浮海兼のねるんてりん

上尺

以于く水く瞬々振りかきり哉

嵐雪

漢丈夫かきく月ひるる以于く

赤土

立志

夕々や金をあけく

蜆

蛭

以負

憂方知酒聖

貧始覺錢神

花より世我酒白く食里

芭蕉

眠ヲ尽ス陽炎乃瘦

一晶

病帯て青湯其を嘆らん

嵐雪

童子磔をふりて唐梅
月ヲ罨す竹乃蓼ヲ芳刈て
浪のさざれをふりて約新
琵琶洗ふ雨より物のほろより
朝よえ月をふりて紙衣
浪人の恋をを請ねて
やぶ乃一おふりて
散さるる同宗有テ折る
藤ハ退之ヲ肝認ヲ奪
雷鳥のちつひに雷ヲ鳴かさん
終るあや輕なる
其角
嵐蘭
一晶
芭蕉
其角
嵐雪
一晶
芭蕉
其角
嵐雪
一晶
芭蕉
其角

傾城乃鏡を拵りて代ヨリ
羽をりて角ヲうす風流堆
化しけり指ヲ出さず草の月
破蕉誤ッテ詩の上ヲ次
朝鮮又西瓜ヲ贈る遙ナリ
はくちあめひの松浦片格
めづるあけやう乃萱庇
蚤ハ私乃蓋を乃ぞ
挿入ぬ新ハおテ乃荊み
市所ハななうく世ヲ夷
人の怪異總長の雷ハ髪子黒
一晶
芭蕉
其角
嵐雪
一晶
芭蕉
其角
嵐雪
一晶
芭蕉
其角

松田くびちあふ雪乃曙
其角
山野ヲ飢ヲ餅を食ル
其角
盗井乃月よ伯夷が足あふぬ
其角
くとい武士の憤草
其角
尺くしに靴書をやうは
其角
笑ひさんやよ帰ル鬼
其角
曉乃痛言を母よりきかぬ
其角
つねはあふあふさるり
其角
花は栖虎山の列をたふさん
其角
柳はすのけ瀑布ヲ酒吞
其角

詠懷

花ヲ今頼政の牙を知ル
露沼
赤杖又持うあふ
幻吁
才い里は妻妹を乃日教う那
似春
雨を咲て振売の怒ル心あり
麩
物をもたし浴堂乃を干鬘
不毒
毛酔を板山は終る志けり
云笑
にくくさく瑟を篠乃峯の毛
四友
余は男唐暮る毛をみる男
杉風
あふ笠刀うさ世つゝ花尺猿
茂蘭
狂といへ花人の合羽日照傘
千春

吉野の五堂へ

斤足はるの應いふひら 千之

雨

庐山の夜上世は花は晝ちん 揚水

山は元む上世東の春人ちん 才九

落花雨美人の化推送しん 一東

むは楚地雨のちんや腐足 俤 洗口

七賢の自畫よ

花は無を弁よりけり翁の那 蓮花

於 軀 不 花 死 不 休 矣

屍 ちと流る かもる 蘭

簾 着る 携る 河の花の如 有

惜花 不拂地 其角

我 僕 落 ちる 名 寐 ゆる 其角

代 推 彫 笛 縫 簾 花 暗 入る 世 哉 其角

小町乃像 讚

おことごとく凡に純乃 姥さる 宗因

髪をふむ人乃さる 所 荒 丈 排

體 中 女 名 なる のう 以 ちる 衣 衣 衣

いふ云へく向人乃 子 乃 の 擲 賤 衣 衣

自 ちん なる 去 人 と 山 さる 招 風

殿へ持ッ 藝 餅うる 揚茶屋

出雪

昼乃君うけいと 嘆り受 揚

杉川

橙のとききききや山さくら

利久

遊人きき昼乃さくら 浅草狐

子堂

目黒お隣堂

うけ世をきききに 嘆ぬ 山揚

其角

梨がけに持のふ蝶さくらん

嵐

海棠やうき世義人のきききり

撫花

たんやき口けきき乃 和物や

九十

あんはき春よりぬ 宿れ 忘き菊

山店

さん金水行

詩をかきききききき 蛙うぬ

机奥

角田川名い田にききききき

文排

麦食きききききききききき

千鯨

田よりきききききききききき

拾螢

市局のききき

下仕きききききききききき

雪叢

さききききききききききき

四友

ききききの盛やきききききき

柳奥

蝶ききききききききききき

翠紅

小雨きききききききききき

紫菀

あききききききききききき

仙家はいまきびぢぢんそそ川原 鳳尾

山吹や无言禪師乃すて衣

藤白子

曉衣薪乃飢若早蕨

其角

子路の廟々へや秋とかすむん

同

其きぢぢにれぢぢぢぢ乃文

白子

ちぢの鯨のさかりを惜むぢ

同

ぢぢありとひく仙川

角

金減ぢぢ世のぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

同

温袍さむく伯母ぢぢぢぢぢ

白子

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

同

心角ハ昼乃灯をのむ

角

あぢぢぢぢ文字此賊衣ぢぢぢ

同

小袂ぢぢぢぢ涼店の風

白子

夕圃宮女のお撲めぢぢぢ

同

大盞七フ星をちぢぢぢ

角

日字月字西風は剣ヲ曲ケル

同

弓張角豆ぢぢぢ半ツ射ル

白子

里かぢぢぢぢ紙子のかじり

同

ぢぢぢぢはぢぢぢぢぢの吉原

角

米の礼まぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

同

新木かりぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

白子

曉乃岡伽のゑ水押さうて
 巖も餅へかひりりの春
 獵師をいさあふ女あとなく
 ちもいけりや首ねの池
 めも具足芦刈やうと耕まらん
 婆鞋はわうと島おらうと
 鳥葬はうとある月日方そうと
 寐さめけりやをうとぬ上臈
 残る月戸はうとぬの奇ヲサ
 藻のねねひ髪ゆめいさ
 惆乃虚勞きうとあやけに

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角
 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子

雨お親乃面う紙懸む
 烟うせう男のまて茶水うた
 入あひちて名惜る度あう
 蝶居士や花の衾う愛ちう
 佛うけけうと並立乃あ

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角
 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子 白子

改製

待つて手正月の梅のむねり
待てしう古今夏之初み。初式
山彦と啼く子親受て切ル芥
かゝる聲や連袂ぬす人子親
思ひ音や連袂ぬす人子親
半日乃下戸困居よゝゝ子親
錦帳の影世法草此戸や郭云
誰謂一南天のむす時郭云
杓把遠歩日干らん

芭蕉 四友 素堂 嵐蘭 翠紅 千之 二春 嵩雪 信德 友白

月夜月夜月夜月夜月夜月夜

杉風

郭云云云云云云云云云云云

李下

郭云云云云云云云云云云云

才丸

郭云云云云云云云云云云云

才丸

郭云云云云云云云云云云云

一峰

郭云云云云云云云云云云云

濁子

郭云云云云云云云云云云云

如菴

郭云云云云云云云云云云云

東順

郭云云云云云云云云云云云

松緑

郭云云云云云云云云云云云

勝延

郭云云云云云云云云云云云

四友

石山の秋月と井乃晚鐘
尺八の棹は深き乃丸木
遊子おもしろの國ヲ尋ヌル
花日々に老ハ娘乃あを引
松ある隣リ羽くふは
百千の戀が仕ふや侍露やう
あかしくして燕ヲ飯ル
年々々青房山の松は似
毛吹崑山は名を晒スラン
木かしは浪士乃市を
回火消乃おさやく松
角之 角之 角之 角之 角之 角之 角之 角之

経より浦魂屋乃るり
夕へハ秋の情を羽さ
拒の勢は決然ある。庚衣
盗人ばともしる鎗の音はけ
眼乃る寒き波を夜風
年とて賊のつり薪よみ尽ス
うさねを荷ふ越の山業
剣術は虚谷よりあふ時
有下朋自遠方来
むし糧を囊に錢をもちて
角之 角之 角之 角之 角之 角之 角之 角之

蛤麴、此やまのつゝ、焼

四

麥刈、此やまのつゝ

若まやむ、此やまのつゝ、れん

自悦

忘れよ、麦の種、凡の初うは

ト尺

青、草餅の種、出は

芭蕉

麥、庭あひさて、いり、賤の、ア

菰白

ゆ、くけ、青、麦、白、氷、雨、祭

其角

麦、あ、ち、薄、月、ア、人、ま、秋

其角

贈一鉄

亦や、輕、令、あ、る、を、あ、を、勲

素堂

消、方、此、河、軌、を、吊、い、り、輕

雷虫

了、い、や、夢、を、む、り、乃、塩、輕

其角

妻、輕、乃、卵、の、中、此、め、ち、哉

其角

あ、あ、り、騾、あ、る、と、あ、の、ま、す、他

葛、ナル、尤、我、の、去、り、此、輕、や、ん

一晶

ま、折、ル、乃、此、終、の、杜、あ、あ、や、先

其角

誰、世、より、治、郎、才、投、い、か、る、つ、さ

其角

重伍 廿五

葛、把、競、曲、中、此、系、あ、ん

其角

粽、ヲ、あ、る、鬼、乃、尸

其角

龍、ヲ、あ、る、白、あ、る、の、此、荒、ま、く

其角

市歩^{アサ}よりかろき雲の山橋
 錦干ス木此間の青老すて霞
 尊乃蘭^{ラン}より猿疵ヲ吸^ス
 衣をへし船^{フネ}旧都ヲ歌^カきけり
 漢笛ハあれと悲^{カミ}きぬき
 志^シま松娘^{マツメ}のうらさ云^{イハ}ぬ
 馴ぬふくま^マて旅森
 情^{ナリ}あふ不破^{フタ}の関^{セキ}乃小奇^{コキ}の如
 ひり^{ヒリ}江^エよりか^カ寸道心
 旅柄^{リョウ}乃証^シ本^{ホン}をとくもま^マぬ
 破蕉^{ハクセウ}老^{ロウ}より化^カもの寺

白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角

懶^{ナリ}ひより月^{ツキ}試^シ穿^スつの時^{トキ}
 詩人の餌^{エサ}乃魴^{ナガ}魚^{イサ}ヲ懶^{ナリ}シト
 花ヲ啼^{ナリ}美女^{メユ}盡^{ツク}を江^エヲ投^{ナゲ}て
 あひく^{アヒク}る香^{カウ}柳^{ヤナギ}を^カかり
 昔^{カウ}を喋^{シヤ}と道^{ミチ}公^{キミ}ね^ネい定^サめり
 冒^{カウ}牌^{パイ}ヲ飛^{トビ}を所^{ショ}より流^ナつ
 三^{サン}線^{セン}ヲ十^{ジュ}市^シ此^{コノ}里^リより時^{トキ}夜^ヤ
 あ^アを裂^ハる美^ミ局^{キウ}の星^{ホシ}
 祖母^{ソモ}ハせ^セ撫^フ流^{リウ}石^{セキ}を^カあり
 法^{ホウ}利^リヲ殺^{コロ}は^ハ雪^{ユキ}の智^チ
 春^{ハル}を盗^{ヌス}ハ^ハ破^ハ我^ガの其^{ソノ}一^{イチ}

白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角 白角

鈴虫をのりうはく寝ぬ夜式
 昔刊鶴のうさ菓や坐兩
 れるふの鶴氏座を鑑う
 まるきふ富士の決りり江戸懺
 ちりめんを義せけしうの喜妻
 世はあめめすや菰たる觸骸
 粽りん驛よりめく枝の月
 行田乃うはまきり
 川島より田のちひさき
 うと桶や行くて波乃晒白

菰旬 樵花 云笑 長吁 才紫 嵐雪 其角 自悦

時鳥の二声之声

五月而此端居古に平家うりり
 五月あうりり田上程しむる童
 満相乃夜や換經老五月の
 夜盆子おし田奇のめくめく義
 いらるお娘の山崎のあし訓

亡母を夢見る

た月書は我義虫や母さひ
 蚤遊音の里ふりれり
 蚊の帳とけり宿あむ四ツも哉

嵐雪 菰旬 柳奥 赤豪 言月 嵐雪 其角 自悦

蚊のこゝろ并枝のすゝり雷の七
蚊すすゝる露の園亦れく
号の山まきり草葉は舎り蚊を
蚊を扇ふや麤嫩々園乃松花
蚊のゐるをいゝと小雨の夕へは
夏は夜いぢりあき秋乃露成
菅くへく不破の旅の此紙帳成
和古詩

子堂
翠取
菰白
其角
寸若
杉風
鼓角
其角
同
宿

とれ人を螢火とてしれり
草のすゝ我の夢くわさる
うすもや羽織細うしわさる
岩巻栢を窓あり顔の螢う那
あさちの地花の園成同ほる
女恥けり螢はもゆる毛切うや
其凡火や螢りうさる栢涼
たの昔夕蟬囀り涼風
うさ此涼や髪を女けみり

醉登二階

酒の瀑布冷交の九天ヨリ落ル

其角
春泥
其角
暖雲
言籬
鼓角
菰白
李下
子英
才九

雪乃艶 左勝 水々月乃麗 芭蕉

富の山嶽乃あつをさめく

禪定や珠数ヲ若利のきれ床 文排

山菜羹乃かきや重さき一虎 嵐雪

田家納涼

草の冬今迄包びーあう那 其角

垢うひうろをいりすーあう那 其角

蛛の巣子に世濁さかやーあ 才九

柳うーや此くらぞう、あーあ 斎素

むく面の木陰だらせいとあうん 拾螢

榎や花影さ喋のせとく酒 芭蕉

けくこれあ様乃あう那 一品

弁唄いぢれく抱うけあう

海にうくくあうん

汗と朽も風うーあー竹橋半 嵐雪

夕風うむすめとあうん添寐終 杉風

東海や足踏うあうタうまの面 松溪

水枯く蟬を不斬の蹴乃声 幻吁

木さきや蟬れもありの舊衣 残詞

夜乃蟬聲れさき日向可明 鯨足

一品乃宿坊あう 其角

日蓮と僧うー汗の雪時を

我

乞食う暇天地を着るる夏衣
扇了そ賤のぬきやある友礎
唐扇のすのりや扇の艶之淡固
扇固のりも紙波所俗の風
破屋あれも傘を月ひす

同
羽白
鼓魚
嵐鈴

夕秋の雨もろきをぬ荒屋う那
我立ち夕立の世りあられり
夕白のすけぬ富士乃枝朽成
優婆塞が不動白一や夕白の屯

荷興十唱

東頃
一品
菰白
長吁

浮葉卷葉此蓮風情色々人
智ういかに風蓮衣を破りし
そのかきさき蓮の魚乃児躍
荷のれゝ母はるゝ鴨の枕牧屋
青蜻虫のゝちすれ故蝶うぬ
お乃きけりゝ已に盡くもちらん
お芙蓉美女湯あつゝるゝ立りけり
荷のうゝて散ちゝるゝや村雨
蓮世界翠たふ二を沈むゝく
或ハ唐茶二酔せりゝ蓮乃楓

素堂

一しり落すれ人をまのいふ

武さうお成我を之けり涼ミ笛

切妻さう成さうく成里

草鞋ういしく徑アリて

はるさういしく雨の清し子

月や日此牛通ふ夕歩ミ

えりを備る市所マの松

鏡刻附乃奇えりけり

ハ十万簀の靈とあゝる

生姜葉成かゝるさる市女簀

関ち字ス之五夜乃曲

翠紅

才丸

一品

其角

図兩

紅

丸

晶

角

丸

雁の丸へて揚弓を競う人

冶郎うきうき蓋乃論

金谷ノ泪うかみうきうき

荒しや茹蘇の風呂臺よ入

亂往昔古首つるべうりうき

主人の瑞を告ぐ初鶉

花の比形へ連欵賞すやる

楊まぎいぬ成系にうき

地女の技よりい深き帯

小古より祈る郎より水と

あも洗やあ園橋れ生れぬ世

紅

図兩

晶

角

丸

取

角

晶

取

丸

晶

改秋

初秋の風かといひ白く青西風

東順
濁子

梶乃繁子小うさかとも

我や来ぬひに夜より系天川

嵐雪
具角

男より女の衣乃おもてを尊

顔去ぬ契いもけちのふりて

治郎ぢうとあける夕あ

磐月よりぞつる乃遠恨

何といひ泪捨ふつむ

森を獨りも食うも菓を

雪
角
同
雪

あさみ一把とる乃修草

角

人待や人れりや赤椿

雪

蝶女うまれく地目さあけり

角

くちくや国啄をれ白けり

雪

敵はあきて籠のくひ戸に

角

いそぐ思ふ陸乃怒るすん

雪

色こけり京より初秋の奏

角

燈かりも影あり乃文より

雪

家への月尺あのは琴借

角

新しき花よりや来る小神武者

雪

美山の笑ひ茶旗の風流

角

[illegible]

叶以ぬを以て清水雪

山城の吉原むすびは松も了哉角

菱川乃吾妻伏雪

狂哥堂古記松在石乃於

もへ酒々調じあ仙雪

簾を焼くみられく心君氣也
 角

才之孤舟女房すゝ女奴雪

萱金かろしうへん背き子こ 角

松虫まゝ守住あれの宮 雪

衣衾乃如之

慕娘月と人とき人雪

若流と私あつたかといふ事
同

清道無文枕故屋越了切

子の胸布拾ひてかくす

五十乃肉傳恥亭奴也

花は宴に沸きまゝ乃てさへあり

やふ入ル空に雨を
收メク。

效白氏之隣女題

二星私憾とあり乃娘年十五其角

玄毫也 移しけん 糸と竹と此 諸洞
 嵐朝

家々々々星北朝麻や角豆原
坂白

は家恥ぬ嫁星は露衣かきんす 鼓角
世に北阿房よりいの室や汚し川 揚水
妹寐といふも窓文より根漢白し 松橋
夕かも星あひそめぬ色命妻 雨椿
誰多向く情やとね持つへ 拾螢
龍尾艸や箱蓋はやく世の手向 菰白
にり火や定家の烟十文字 其角
玉祭ル里や梅川男香炉より女 松湾
貧せこり初高寒より 葛羽織 芳春
臨素堂秋池
風秋の荷葉二扇とくくく 其角

和角夢強句

あさうふあさ食うふたもと哉 芭蕉
あさうふあさ身をもく刺哉 寂句
朝鳥乃曉をも 犬の声憶い 蕉花
あさうふは傘于ていつねぞそ 曉雲
露はあけけん友とううしね 黄吻
萩の音は愛化のそそる哉 暮角
朝あさうふはあさうふ

あかり久しきとあさうふ

所感を感して

あさうふや仙洞様を命う那 其角

破芽

風妖々萬々秋の留す

李下

猫枯やうみを入す古葛原

東原

芭蕉の女袴くくくく訂女

山

玄甫

新萩令聖中よきう持美人

其流

萩新刈了西丸に枕う守男

其角

才を庭前の木にまようそ

渠何人目ううう女村々

風蘭

ニ夕

西仍

秋を此は所するの夕哉

宗因

定家

舟多うとる屋乃秋若夕哉

風雪

寂蓮

和歌の宵接く川山の夕哉

其角

さひくは秋向あうる思に秋姿

自悦

人多寝て心る夜と秋の昏

麋時

田婦子を辱て蚤れうれ心秋

十尺

我立り蚤花整むる犬く秋

杉風

いふことくいつ神の時あうん

子英

猫ふくりけを蓋の書いすくらん

其角

三ヶ月や秋良の夕へつちりん

芭蕉

謫居

象浮の月や流人のくすけふ
月子飢て旅人古く乃るヲ腰
月子しら家婦の情のちる式
昼のそめくきん三輪の森
月と波越海の山若木下女
あふひを日はの月此麻衣うれ
牛吼る山漁の軒くきり
月ヲ旅征人首と酒銭あらん
弓カラ西よりあつち秋の月

琢菴 鼓角 杉風 東順 其角 四友 柳與 山店 明治

何配所にも死あき 国の月常玄奔
寂士の月我あきんや 志目捷
故寺月け 狼客はゆりあき
月子親く天帝の塔よあき

舟中吟

子尼女船やあきんは掉ぬん
茅くつて屍よこきりきり
けりけの月あき角あきりけり
茅けり裏鞭月もさききり
や尼女船白ツクリ乃桂う那
四ツもあきで賞うん月尼川

疎言 北観 才九

杉風 三峯 友吉 云笑 翠取 菖白

芋、這抱て酒よりあらんけの側
誰家の思婦を月より覗く杉戸の

桐橋雪叢

土船ニ飄掉ヲ月ハすめ月ハ濁レト也

生ハムゼを放す 蓋

其角

興
とけて
西
此
着
元
烏
角
巾

柳與長吁

萩すり固凡み〜〜本

蓬生のうき蚊屋の中より

楓角

鼈乃多く門おそめあり

吁

ぬ寸人を矢に待鼠窓を射る

柳

下女、読子、志、女、使

洞と直名乃 片字を切ハ 禪

西夜の文挑とく

縁フカが
 髪フカ長フカシク

柳角

うゑを盛乃 酒中花の時

吁

幾少彫ホル様去枝を痛む人

角

かゝる處に落城の月

楓

笠輕韉
平素分庭
之別以之

吁

冥事之所佑護者中山

凡构

柴荷ふ妙の僕とありふけり

扣

老母泣牛子のそとを吟

角

うに雲北舞城より同所

折

乞食の筋をいける壁社
 めくく傾里の垣のやうく
 こ路をゆるり降ぬやう
 けまの螢は舞うきく
 罽行のあみと下官哥も
 りみ杜子美湯治山中一夜雨
 看ちとがう三線ヲ煮ル
 朽坊は化地ぐりやけぢり
 まをふやめ寸獨り夢れ月
 移りて業年うく薄うけ
 夕を映る情の木偶

吁 角 机 吁 角 机 吁 角 机 吁 角 机

進めす錦木供粮立あう
 地花は粉ふ霜老白粉
 三七日ハ亂壞の相を啼鳥
 食腥くぬる夢れり
 奮惡の如く花れを若
 毛虫ハ蛇の孤々争ふ
 稲磨歌妹乎雞時乃羽
 多多幾晨奴良乎加毛
 松風乃里を叙すくれ式
 芭蕉序ノ夜

吁 角 机 吁 角 机 吁 角 机 吁 角 机 吁 角 机

秋風 戌雪

墨條を 拓鼓又隣る 石の那 其角
 亦此里 賤々夜を此 火舟う取 其流
 物敷ま 此世持きぬとや 萍菴 黄吻
 石菖を 川の蔭よりうけ 露 永原 愚心
 うつ さんて 州刈 鎌を けし へん 飯句
 難化し ころころ 飛フ 略の 夕へ び 甄落
 傳ふ 曰 縮負 鳥い へく べなり 四友
 簑うし ちとく ます ちれ 於 羊刈 男共 子堂
 於 芋子 初々 夕の 夕へ きあ あり あり 嵐蘭
 けられ 山賊 きて 業山子 彩 子英
 車馬 三句 句 句

有蘭草 菊宜止
 俳門 有芳菊止
 有蘭草 菊宜止

芭蕉
 芭蕉
 芭蕉

賀はつ ばきや けん 小菊系 翠白
 羅糸の 硯菊と あり あり あり 翠紅
 菊ハ 山路 かん の おひ あり あり 暮角
 伏蘭 け あり あり あり あり 松風
 千家の 騷人 百菊の 余情
 菊う あり あり 詩人の 質 あり あり 其角
 松乃 あり あり あり あり あり 曰

庭あもね草尺付にけうけり
 小上戸熟柿の林かられきや
 ろや夕木浅く柚味噌の夕烟
 落推る雨うすら暮る木葉菴
 栗栴ハ塵壺は秋乃り来れ
 焼栗や展蔡 月乃 雨
 指虫れ才を栗を啼くういふ
 栗のかく藻の中はせかきけ
 ちせつるやあわやう 酒旗 凡
 傘合羽をせつり雨影なるや
 的人帰るあはれはせの命式
 信徳 一峰 拾瑩 蒼席 仙風 幻吁 其角 ト尺 嵐雪 鼓角 雲素

せせれはけいへくたけり人佛の日
 こかしきや露水の枝折るせ小舟
 さひ新やいつを来乃夢の巻 長柄 寛満
 表町市より新此きりさび 杉風
 カジカ此夕へ愁人の標の巻を現 其角
 遊心寺ノ高雄カ廟
 衣るおはるう花ふき乃視 才九
 板よりくきを鱗乃龍紅井 羊角
 鯉のやうん徒白く瀑布のふ 四友
 憶老杜
 颯風ヲ吹て暮秋歎スル誰ガ子ッ 芭蕉

九月盡

新ぬ夜お風おれう秋法師を火

其角

上冬

僧うかまけり松むるを尺里討ふ

杉風

まろくも此のいさきとくりて

世はうもも所は宗祇のやうり哉

芭蕉

あふれきるけ兼城軒の便於火

飯白

あふりうるるぬき所村討ふ

其角

君火爐うき身討ふ此小神を那

秋風

紫乃暮山は紅の——くれうぬ

子堂

葉拍や風とくりて松をやう

冬景

赴泊船堂途中感

波道黒し夕日や埋むる小舟

揚水

夕かきる虹の傍橋つる山

心

端山木の風かきんかへり茸

其流

冬燈尺を刈といふまきまき此邊

冬景

冬うぬの道はあふ人や牛乃屎

卜尺

十月蟻

きりくす嵐此巢より鳴ゆるぬ

嵐雪

冬虫枯て寒徑を這ひのぐくは

子堂

氷くさん日陰の如様日あふ魚

飯白

落葉えんふり蹄やうきる雪

拳白

落葉ばふくや細豆よつ寒夜
霜白く枝雪くそんれを月夜
多と吹く肝裡に夜の木葉式
枝板おのゝ実あしてかきし凡
茶れふや上戸の才 梅乃兄
毎窓の文り短檠の下は釜睡
貧山の釜煮る帝声寒
松風や灯は富士臥てて西屋形
其岸刻火箸を并の幽々之
犬引てさうぬ指はりり里夜奥
宗干富るねん山里をれさび別と

柳與 同 同 其角 芭蕉 杉風 飯白 香扇 烏巾 翠石

此よりあゝ山人うきり梅信ひ
存柄く七世れ櫓は遠あけを
茶尼の箴の端ですー夜の櫓
雪夜
俳く、あゝさあゝんそゝ湯式
夜着の重し、曇天は雪とさゝあゝん
も心心地狸は酔る雪れとさ
僕り雪夜犬を枕のそゝ寐れ
らんかゝる寄ス枉句此法師をれ見
雪を吐く積投りり 化粧娘

富峰

幻野 芭蕉 麁精 杉風 李下 敲角

約アハナノ薬もらんふをれを
 不二目鼻混沌の王死言り
 大回リ磁石ねらんやれ雪
 富士うめす麦田にふれ早苗かな
 一の富士木綿の魚のけしとて
 世をさうか香煎ちまきくぬわ
 藤ふくふくふくふくふくふく
 幽戸推てふくを毛氈の艶かな
 新ねるふれ女の角にせー
 ちちちまふ位夢醒るあつと武
 くらけや骨痛をいつくもの下女

千之
 轂角
 空鬼
 其角
 鳳尾
 九十
 拳白
 言色
 紅友
 蘭山
 利文

雪を織てびらりと白く山根
 鬼茨の雲いささうりーふれ窓
 ふれ奥岩履るがすふれさうふ
 雪者定離雪うあふれおの雪

峡水
 扇石
 才流
 ゆさ

旅行

城乃く合羽ハきーふれ昏
 松原ハ飛脚ちのきー雪の昏
 雪の新牛馬ぬりきつー解
 雪れ犬箒ふかうや 姨捨山
 憶李白
 月ヲ尺で東坡ハ雪ふ才投人

信往
 一晶
 文排
 四友
 才九

河艸は貴妃の侍を恋
遊の代乃小哥を琴は思君て
早苗車を喜雨臺より
カルの子は感あり持の花盛
難すくいは濁す日の陰
秋風は名残が待乳山すみ
瞞人出家ヲあタへく
縮書叶ぬき及は夢の才をやとす
魔境の月を眺くくして
山寺と基をうけ凡の古寺は
茶僧の首烏豆ヲ啼

子堂
其角
九
堂
角
九
莖
角
九
堂
角
九
堂
角

顔淵は麦食愛のひしりみ
葵を藜もあつた庭
住むすむ紙工をうけはあふ如
吉原北郡よりりり乃里
花より深ムる磨賢はつとと
董をさくく和哥の撰算
永さ日も校布の上下胸あひす
大乳は埋む儒乃尸
今哉角天地を揺るのみ破る
軒はなつて睡洞より入
葉荒や抗離してさくける

堂
角
九
堂
角
九
堂
角
九
堂
角
九
堂
角

名城松の荒を歌す月

金堂^{こやう}わりの此夕へさやうにも

伶女すぐれく玉虫を舞

とく^{とく}あり平山はわれはるん

文幣^{ぶんぺい}うけも積座のむ垣

絶りの^{とく}燈の肩ぬく^{とく}西

さつ男^{おとこ}の奴^{やつ}みをやあ荒

誠より時^{とき}もあちくおがたぬそ

あき^{あき}か入する^い岩屋^{いわや}でる

花さうむ昔^{むかし}は尾上^{おのの}れをわら

やう^{やう}の^の葉^はさく

ま^ま膳^{ぜん}の^の味^{あじ}すく^くめり^{めり}氣^き遠^{とほ}く

俳諧^{はいかい}臺^{たい}友^{とも}らう^{らう}め

角堂

耽^{たん}是^ぜ破^は戒^{かい}教^{きやう}生^{せい}

飲^{いん}酒^{しゆ}ももく^{もく}う^うけ

妄^{わう}語^ご

甄^{けん}を煮^にて^てふ^ふも賣^{ばい}世^せ代^{だい}彩^{さい}さ式^{しき}

一品

偷^{とう}盜^{たう}

賊^{ぞく}心^{しん}や河^か甄^{けん}は迷^{まよ}ひの代^{しろ}ころも

李下

邪^{じゃ}淫^{いん}

妻^{さい}あ^あぬ^ぬわ^わな^な情^{じやう}こ^こ小^{せう}衣^い

其角

う^う干^{かん}や枅^{たい}あ^あ人^{じん}蔥^{そう}乃^のう^うみ^み白^{はく}

子英

角堂 九 角堂 九 角堂 九 角堂 九 角堂 九 角堂 九

林小舟遷の如く乃西火白く
りてや火燐より聲の白きとやく
三十日引芋根より雪乃約
一年三百六十日

開口笑無三日

飽やとてちのちと曰乃轟と
世より白波より大根とくみ
月雪は芋のあて戸や板つん
るるるるるるるるるるる
百りやれれれれれれれれれ
傾婦を蘭乃肆よりる

茂雪
抑與
角止

李下
其角
同
下
内
角

敵ある用此を依りて草

鳥の天下一番の鳥

文盲か金持か金を以て鳴る

にとてり勝るるるるるる

其池はさぎとりのあひをさ

土中峰のやんばる心加賀殿

細めて國より曳此後刻

多うういかに黒木串材

髪あうのむみる男内ゆり

春宵君とよりあひのあひ

月よりくまのうりれ上戸や

下
角
下
角
下
角
下
角
下
角
下
角

小紫

舞入の近づくまに初夜

わくみんく葛うみふ

嘲りそ黄金ハ鑄ル 小紫

凡そ夕へ切籠灯の記

酔ちぬ冷茶ハ秋のしうそ

こぬ夜の格ふ時を憐む

夕月此前ハ潤はくをほく

金搔徑ハ鞠うみと思ふ

葉生姜を世物ぬやいさへん

指汗かづるふきの 芭蕉

角 同 下 角 下 角 下 角 蕉 同 角

寸法師切しの衣乃みかき

芭蕉

昔とカハ 卒都路大小

下

行乃多門を乃せと花の雪

角

凡ま三百人の 芭蕉

同

酒債尋常往處有

人生七十有来稀

詩あきんと年を貪ル酒債哉

其角

冬湖日暮て 駕馬ニ 鯉

芭蕉

于鈍さ夷又同はゆるすん

同

黒鯛くゆー おく女が乳

同

角

蕉

角

蕉

角

蕉

角

同

崔

角

蕉

角

司

焦

11

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

新山が

去月病を治りて本郷山麓温泉に愈え松尾
もよりやう志をなすれりいづれに惟ふなり
さ月々めれ之日郊野を歩み春よりも
新郷にへりてあれぬや、晴なり雨なり
老奴乃十人たりれるをいさなりけり
のゝもにききあふりてわねりうかきあふり
何のりを毎にうり文鱗の旅亭にききあふり
とてくちやうきなりなりぬ一たい温泉
にはすなりて此山の閑ををど人は

新山が 文鱗

雨かきよ妻れ袖さる紙幟 同

くわいのうに先きやまて世波をさる

岩根こす鞋は鱗あり走鮎 其角

つらな枝を水の水のむ様は侍人 枳風

傍り薬師堂あり朝々暮々に此僧が訪る

房山恥しがぬ笑をむく大系の十如院より

雪かきさるる三日若つれさるる古人乃

あふに祇長基依の能をぬるるわたり 世は犬原三吟と云

我等三人かあるる温泉なりさるるいさるる

わさるるさるる

其一

あふとや早苗よりなる者の門 其角

一のふあふさるの鳶尾の下薺 文鱗

宗長乃名をせせり月晴さる 枳風

其二

涼く麻を本れるの星を光る 枳風

水札の羽をひぬさる山あり 其角

柴人よとぬ宗祇何やん 文鱗

其三

菅菖蒲ありれさる若菜を 文鱗

驛の蚊遣萩菜を 枳風

椀井の枕をさるる旅寝さる 其角

身由意の三業法報應乃三如来也
すくわくくくくく 醫王堂前奉掛 干時貞享二年 丑月日

五月雨を比の雪ふゆる日数く那 文鱗

さみしや湯の桶わ山又燈けり 其角

此山はつゞきくくくく此野ありくくくく

おろりくくくくくくくくくくくくくく

考よりみゆる灯の花乃 曙秋風帝様くくく

の鳥すくくありくく 奇石怪松くくく

まゝ一母あゝく

奥や滝中よりくく谷乃お

宗祇くくくくくくくく我か芭蕉翁の

子裁集 山里れはをりくくくく 對州

とくくくくくくくくくく

菴三ツ牧道をあゝぬ太山く那 文鱗

蛸位ニく芥にもくくく 標くは 枳風

くくくくくくくくくくくくくく

そくくくくくくく 山中く客ありは奇哉

もてぢす

夕暮い海を尻けりく 鯉の那 其角

馬射く念仏の上く 誘けり 枳風

月清集 秋の雪くくく 麻衣くくくく 山猿の

むい情あつくも鎌倉若隠士未琢ざんよ未
く才さうりけるようばあうれおれうり
ゆるに氣ありて其句むろりんといひ
古き短冊をのさせり

本城入湯のはあま人のもとより九献
わくまけるをもてあまの事

あうもあまうけきく酒樽あ

をえぬすてぢりける式

浴りをつんでぢり形又宿あけそそ鎌倉
にうく松風は日敷ぢりそそ茅の湯
ありそそ松風は日敷ぢりそそ茅の湯

諸君の所思

墨染工甫の輕き簪憎うん

文鱗

黛雨の崖坐頭一曲すえ終へ

其角

行水腰越を通りゆるとくあまの事

餘すぢり慰子をあまの五月式

其角

新長谷寺に詣る

寺の風は涼しけり

又鱗

漁りやうい酒をとりかきそそ若鷺

にもあまのちりきるあまのにも旅のあまの

もう月されけるむし鴨の長月はのふこやと

いふあまのちりきるあまのふこやと

う愛し人のかかりけきは

ふとろける芦花まのすゝ糸蓼（タネ） 文鱗

蠅ぢくい一ちねね人其乃兼 其角

露々罌（びん）穉（こ）一五山ろくくのすうをを

先建長寺にいゝ或曰無詩俗人（俗人）と

爰に終り我は俗郎一衣木立 其角

名をぬぬる此涼（ひや）ををれく 文鱗

園光ち入用山佛光禪師をおするに所

か常あす慈（あま）都ういゝく生る人（人）と

むうふと一野鳥肩（かた）は野白竜架装（カサ）は現

すはへ一ち世のありきも成る一倚（よ）子

ふ角（かく）と龍（りゆう）のふちを白龍をさる

ねり谷塵（ちん）りく山ねの川くは人毎心（こころ）に

を物く銭すは澤庵和尚若相山順礼（しんれい）はか

せうふひける結勝はねわゆ

法乃色空（しきくう）る蟲乃巖（いわ）の那 其角

常盤木の蔭（かげ）紫みよや瑤（ぎやう）の瑤 文鱗

かろに梵千大巖和尚のる牌を礼（らい）一

香一爐（ろ）るすは錢を包けり 其角

彼れ高のいさうかりける世は抑（おさ）へる平（へい）より

百六十と世やがり十二に業徳のる免

う下に擅（せん）一箇（くわん）毎公若（わ）は遊（あそ）る詩を盛（も）耽（たん）

さう坊先一編投札を色

妙あるく卯花ぬみなる非

を成

四月五日

其角雅生

らうき文麟亡父若自抄れ道の厚く此草
堂よりおをけり

梅はるく世花小菰参をこころる 文麟

とくくまきりぬわつる旅寐とくも坊々
いりぬく名をすはあきけにさぬ金沢はのぐ
しけきほくくうらむかきく月を看くゆく
車奥の凡月をわらわぬをきけり

けきかぬ富峯の奇秀をさくぬもいり
けきけき黄金をつひへく覚えぬと富峯
一隅然とさるる参る人けきけき

一時ん若きとく人々もあき

能化堂まつくし傳をきえうけ 其角
鳴くや鶴れぬる山々やとく人 文麟

狂雷堂 晉其角述

虚無齋 鳥文麟校

丁亥郎 川蚊足筆

附尾

臣部を駒千代の角をさうり式
 けうけいする其者湯炎
 毎積んて野渡に物成然らん
 毎折響声言れ此岸新
 月や擲る花水又翻はねて
 ちと一雛抱ッ娘のりゆゑ
 春の雨揚屋はちたる思ひ也
 けみとあそびにぬの名らん
 大将を士卒も同一日若命
 片う江ぬく埋む船衝

李下
 文鱗
 其角
 蛟足
 鱗下
 足下
 角下
 鱗下

津山や和泉の間と淡路しま
 踏一はに法矢秘授と
 赤食まゝ代の曾我の初法師
 早ふもかきぬ下るをあり
 月をぬく秋を桂の福ありか
 病ふて時多宮司灯を繼
 ちり瑠璃のと食とるれらん
 才延やつこ母の福あり
 舞一夜麦刈は若宿りそ
 雨の林乃枇杷折りゆく
 引々やふふ無人和馬北土車

角
 足
 鱗
 下
 角
 下
 足
 鱗
 下
 角
 下
 鱗

世を凡る今の山城乃京
 鍛冶の椎打肌ぬきに烏帽をきて
 君よりうろたふ舎替れ舞
 思ふも木松の浦泉みみれい
 夕のれぬ櫻をひらりたれ
 麻糸を織る酒屋はすれ
 う人の傳れををる月
 男山表八向をのろけり
 数うまう九城は杖つく
 くれえより後夜をいひわけて
 涼とあふをみや水のそと

下足 下鱗 下角 下鱗 下足 下角

親者へ
 等々
 大麻の
 宗祇宗長 柳ささき

下 鱗 角

花つみ

を祿とて事やは母乃ちよ訪すかりし
思ふにうつるも木も出づひをともほすうも
うもわれも思ひを思ふ中へせく心さ
手向侍りしを里彼祇云乃一とせれ思ふを
思ふ句はくはつれきし海山の情を思ふ
あまをききし猶法將讀佛系を思ふ入中
乃みおもひあり思ひんいそふん思ふの
人のきく思ふおしく思ふのやを思ふて一
を思ふ向ふみちりれも花摘と名つけ侍る
その日こそ思ふの思ふ年け向く結縁とありて

予う向れ下よりねをとり飛一はくらん令
名にさふひと事あるはくは陸脚生親誼
をわくしるあふは日記あれとあり

花子

八日

上汗寺

一灯花 其角述

灌佛

や暮る

母久る

獨玄

屏もとあふひる

身よりいけあふ針をや母の寺

彫棠

九日

むく雨や灘山をよりぬみま

角

信釣雲

かきりけり

此里より店より

羽黒 露丸

十日

紫休のこころへもこころみきり
いりこころのやこころかりりねを
ゆきかきりこころいりこころを

生れねいにききん汗 拭

角

十一日

ゆきくし 一歩も歩かず

郭公中入あぐさる芭蕉か

同

三月十日とて万日の念仏
えいとうめいさふ
えいとうめいさふ

清水寺

山吹光多きと卯時迄向武

行舟
幽水

非情をききし後まきま川他

ゆくとまきも二つかりきり燦るそ

十二日 東叡山院

僧心のまきもひとやあ 柳

角

十三日

けしきもゆるぎをり 調子うた

同

十四日

浅草川 運路

ふしきや細代ふたふたあつた

同

十五日

雨

紙合羽かるしきうふ世交多佛

同

十六日

おおたきのゆきのあつた
ゆきくしきりけりあつた

黒牡丹れききりきりあつた

同

十七日

あつた人のあつた
あつた人のあつた

牡鹿 懺悔ききりきりあつた

同

あつた人のあつた

庭白くおかしきなりんぼ

秋色

山様 雲をよりよりと云ふと云ふ

彫棠

十八日 雨

白露を石葛より持ち 價をいふ

角

十九日 自愧

夜あけに母を病よりきき 水鏡を

同

貞業

下帯やゆきをいふに 知をいふ

玄素

辞世

夢あれや 夜を 明日より 夕

正春

廿日

射者中実者勝

角

幅をいふ 何れにあり 公

同

廣をいふ 何れにあり 公

智月

善をいふ 何れにあり 寺の 権

同

善や善久し 何れに 権

さの

廿二日 佛骨表

志をいふ 幅をいふ 何れに

角

廿三日 申の日

夜ふけに 命をいふ 何れに 入る

同

家業の 何れに 何れに 何れに

紫雲

おけける扇をさくくし海舟

楊水
全峯

繩ささくんと帯うううしひゆ

うううけしやひひやうと古き

閑居 あつたけしやひひやうと古き

糸忠代ううう

我下は何を志すか お 抱 お 抱 お

ト宅
魚口

山鏡を穿れ お 抱 お 抱 お

今あわれやく お 抱 お 抱 お

同

桃の葉おろや お 抱 お 抱 お

野狐
知津

果て白紙 お 抱 お 抱 お

廿四 お 抱 お 抱 お

橋の お 抱 お 抱 お

角

お 抱 お 抱 お

牡丹芳 お 抱 お 抱 お

佐
菱菱

廿五 お 抱 お 抱 お

か お 抱 お 抱 お

角

一時も今この お 抱 お 抱 お

由水

お 抱 お 抱 お

帳を お 抱 お 抱 お

琴風

お 抱 お 抱 お

さ お 抱 お 抱 お

百里

修城 お 抱 お 抱 お

同

廿六 お 抱 お 抱 お

會盟

吏乃をめく亦く夏料理

角

廿七日

短衣や短日ばかりも納むれ亭

同

無新へゆく人々

秋のまろく足く事々水田のサ

角

廿八日

ある人の野々し

肉川や雪のう玉菓より雪雉

角

は皆別々他々箱り脚の
おかし山旅本坊奥の北

奇物と云ふ事一月、台

雪雉や雪をめく人々雪雉

露丸

雪雉と人のむきふ人々

川赤岩網子雲を引立ち

雪良

鶴の飛あふ小名あふ三日月

釣雪

雪のより天をうかへ旅旅の昏

殊妙

しも南と云ふ人々雪雉

梨水

眠て昼の陰より雪雉

釣雪

百里の孤を木雪れ中追

翁

山つゝ人小娘の記を草人

雪丸

雪雉と云ふ人々神木れ森

雪良

雪雉の跡をいり雪雉

釣雪

豆くぬおを何と啼く鬼

露丸

古津所を寺にあり雪雉

翁

来よ立校しきぬくも萩
 月見と引張るれあやうに
 髪あがけろ ウスモ 羅き此中
 まけりて犬のかきけにまねて
 的場の末小喰家山崎と
 もを解しとりの年代力石
 海くつてく醒が井中水
 足川のうかきともいひり妻
 歌乃門中二夜移より里
 かき置もまを置中此地おそ
 まくひにまき山太らんを

梨水 曾良 翁 露丸 狗雪 翁 露丸 圓入 そろ 露丸 翁

うか雪へ標の排架を上き
 湯の香くくく お 旭餅と玉
 聴のまを特者より矢とまを
 篠くけし海をあらうり此法
 月山の病吹風を寄あしむ
 熊路の火のくく電の光
 ちくくいの橋をえきくくくく
 写ふくくくく お 戸敷の窓
 監 受 けりてまをみ妹よりまをほそ
 御もそお園くくく お 汁
 魚の肴小漁ありと形のあみ

梨水 病丸 釣雪 田入 舌良 梨水 露丸 釣雪 翁 露丸 會光

暮らうちあはれ夢をみる

紫

湯殿

清くもてゆくのちゆき結

鳥

月山

雪の華のちあきく月山

同

月山

雪の華のちあきく月山

釣雪

廿九日

雪の華のちあきく月山

角

青朝日

雪の華のちあきく月山

雪の華のちあきく月山

角

雪の華のちあきく月山

彫棠

雪の華のちあきく月山

溪石

雪の華のちあきく月山

雪の華のちあきく月山

雨

雪の華のちあきく月山

去来

雪の華のちあきく月山

秋色

嵐説

雪の華のちあきく月山

落柿舎去来稿

嵐く暮ニ出テ朝カクル家ニ居テ人ヲ恐ルハ

八足ノウラニ癡持ケラシ山椒ノ眼小豆ノ鼻齒ハ

糸ヲ付テ小袖ヲ縫ベク耳ハ木葉ノ芽ニ似タ
リ地黄ヲ喰ヘバ毛白ク太東ヲ嘴ハ口毒アリ尾切
テ錐ノ鞘ト爲ハナシテン背腹ノ色ニ目出テ薄
モ濃クモ赤出セリ被カブリタル姿ノ若ナルハ嫫
入ノ繪虚言ヲラン筆ノ用ニ豎ヲ抜ルハ老テノ
後ノ悔カ顔ノ烏魯ツキタルハ晝鼠ナレバ成ベシ
情シクは身ヲ乞を思ふと油と吾等世の酒
中びりりれを酒に酔ふととんやれぬ事を
そゝと破るハ好まりくすかじを酒
の筆よりそを情なる砂の記みをおく
かゝるものやと好けあやと雲を仰ぐ

海平水乳と何を漏れく人々の例は
とつに流す書と読めれ事おとけらん
名実と尿くを糞よりまけり地獄并
若く雲てあやと海より月を此處と
そとやとものかこれなりん

ツクく御身カ貴ヲ思ハ牛ハ形フトク虎ハ心
猛ケレド下坐ニ立リ百敷ノ賢キモ甲子ヲ迎ヘ
テ年ノ号ヲ改玉フ春立カヘル遊ニ子日ノ御賀
アリ子祭ト申スイツノ時ヨリハヤリケン漢ノ倭
ノ歌ニモ洩レス海島や原野ノ強ニ住海島殊
俗ノ危奄が来いといつ我朝ノ人ハ野鹿トツ

御身カ隠レ里何レノホトリソ武藏ニ崩穴大
比叡ノ禿倉ナルカナドカ帰ラサル頼毫ガ勢モ
本意トゲカタシ猫ヲハムノ譬モ不善ナラハ成
得シ彼ヲウロシキ睡士ト世ニ相住センハ面白カ
ラヌ浮世ガ

面材持を、栗北、

いつまひしつの中へいづ
つとくはうゝ法師もふり
わたりてを排衆おこす
あひてはゆるがせなり一夏
面々れけちあるよりなく
此集よりさ次作るあり

二日

うゝふゑもとせり

中の如き蔵甲や庫等の内

角

三

住人まゝの
いふとちて銭

梁の蠅を這うんこまけ人

同

VER
A

年の年の年の月の日の入入

競ふ埒なく入身者いふやうに

同

抄本

有卦は天の象を
酒は地を象

百里

西
人
之
子
也

元日

張重之之梅丘

素見

小
脚
空

くさくさ

通江

角上

善

丁卯遷居此明之朝

枳風

高の峰より所より登り山とあり
羽よりけり多きまれ雲をひらき
あまのうへに捨羽織のけりうかぬ
夢のうへにうけりあまのうへに
木下にてけりと捨もきりうかぬ

東嶽山行

大佛よりけりけりふを名をきりけり
一吸をあめのかきりけりけり
あまのうへにけりけりあまのうへに

心喪

あまのうへにけりけりあまのうへに

湖春

湊指

曉雲

巴風

翁

路通

去来

尚白

幽也

草のうへに念佛のうへにけりけり

雇人あまのうへにけりけり

初瓜と妹よりいそぎん親 独

御酒よりあまのうへにけりけり

蝶風よりあまのうへにけりけり

供所の顔よりあまのうへにけりけり

驕もあまのうへにけりけり

細きまをけりけりあまのうへに

あまのうへにけりけりあまのうへに

あまのうへにけりけりあまのうへに

三為

一為

巴風

文鱗

加生

珍夕

尚白

翁

由之

風喬

倉庫口主

沾荷

甲陽軍謠をよみ

あつとむじれ信濃の武士はさうが

いぢあふ中村いふあし

秋風は吹きて暮るる夜すじ

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

菊の香と月見の酒はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

雨後

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

雪の如く川大佛の石

水鳥のくさやいふと浮とて

物々さきさきあり秋のや庭の霜

いさゆいさゆいさゆいさゆい

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

あつとむじれ信濃の武士はさうが

去來

翁

秋風

同

尚白

山川

翁

同

楊水

全峯

翁

宗流

凡

海

凡

桃園

師をさし一糸殿を衣配

野徑 菊

右四句俳番匠之墨槽也
仍駢入競馬之境畢

五日

花あやえん幟もろけ家あしけ
標佩くわがしめりや芝看
年あさ人志ゆや下地歩
梳る甲せん葉乃齡うあ

角 嵐雪 漢石 柴栗

六日

歩波浦もろく
地もろく螢のまにくそちの潮

角

七日

碎てちる

杜若はもとく妙ありる
花たな横きも海のけり
あり雨し降糸も海々帯幟
事ふらに降るも是にま荒舟

漢石 百里 是吉 山川

宵に帳を枕をわがた八群式

角

土のけく古葉を降る竹あし
折をゆく古葉を降る人様のを
帳を釣て露肌やんまの帳の云

巴山 同 同

八日

得正観音像

平より蓬膠より志まぬ白武

角

梅の香やまゝの香としは
つゞきしをいふは
つゞきしをいふは

名木を乞食中 智小梅の中
炭焼を中く 孤ぬみなど
旅人より 鄭ある 戸を
その家とぬるも 忘るけり
一志を底より ありし
福をふへ せり 火焼
十日 絶景
五月雨や 富士の 煙を
志を せり 散砂とて 振る

山川 崔雨 横儿 春魚 松翁 同 角 沾荷

おの 蟬や せめり せめり 落所
おの 角小 ありし 藤子
回廊の せめり せめり
大和めり せめり

坡 柵雪

和々や 松を 林と 日た 光
五原寺

夢柳と 我府と 水かき
大五輪寺

墨染より 福より 茶摘
多武峯

新法より 家より 家より

葉わしより遠四八が北極の南

十二日

きみふふやうきととふに

角

十三日

岩翁亭願送解

みいおや隣へともふ懈^{十二}き足

同

浅度指くひれくや 好むは

岩泉

野草も長たきとて 夢うた

同

形くひもきふ川 好や 初 鯉

同

同定るは 華めきじ 本 出 九 非

遠水

十四日

枇杷の葉やとれも角あき 蝸牛

角

形よりすけ 形も 枇杷の 廣き

岩翁

女けく望く肩わく 事 好む 形

同

言種と小 鉄の 角そ 初 茄子

松嵐

十五日

形 好む 形も 一 好む 名 新

角

朝の 葛二十 好くも 好つらん

三ヶ

仁 好む

門 好む 好む 好む 好む 好む

同

十六日

好む 好む 好む 好む 好む

好む 好む 好む 好む 好む

角

十 好む 好む 好む

螢あしあはれけん我思

同く作あ

板若色もろねもろろくしゆを登

同

十七日

つこの社国例あつてうせ
うきうきを人よりうきうき
けるあつてもあつてもあつても
えつてうきうきをあつても
をける昔を井もいあつても

十八日

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

十九日

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても

いふふふあつてひふふふの月

同

廿日

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

涼しいねとねとねとねとねと

角

廿一日

市の街のついでに

皆仍り葉あしあつてもあつても

同

旅人あつてもあつてもあつても

沾荷

あつてもあつてもあつても

百里

あつてもあつてもあつても

水花

あつてもあつてもあつても

梨水

廿二日

夜讀書

牧を打や枕よりあふ流を乃重

角

廿三日 雲のほのきみ能無り

田ふやけく酒吞ききそ清水鬼

同

廿四日 諸立人をあそんき

舞場令園のき月れめくくる

同

廿五日 茂叔讚

傘と蝶蓮乃と紫と城式

同

廿六日 山田昌悦きき

汗濃きき衣れ背ぬひのゆみあり

同

夜毎無

宮もきき松より歌く茶の白し

巴山

父の寐るきき

夏衣いつくあきくん老乃腹

同

廿七日 湯乃人おききき

輝乃きききききききき

角

本宮川の材ふ清乃きききき

山川

廿八日 井中うみあきき

砂のめきききききき

顔あけきききききききき

角

廿九日 毎興

更きききききききききき

司

一夏半尽

ふる摘く片枝葉の形を極式

山川

花つみ上 終

花つみ下

六月朔日

白雪千里を旅する雪を
宿がや家より冷る氷餅

角

漢石

遊瀛海寺

あるものや暗とりふ舟去人の所

沾徳

二日 所見

飛う家う星う川を乃 涼式

角

巳百

中るれふふ振るるるあうる

曲水

藤や魂をうけ川はくみ

柴栗

夏ひとくハ恨んゆめさき

万四

三日 巴風亭

角

水うてや蟬も雀をぬきと
あまや蚊の寄るる外に限
三ヶ月は涼きまきさ涼端
うけくと底しあま云はと

巴風 漢石 已百

ゆ秋なり折る

白川をゆるぎぬきとゆき

同

四日 極小のうきと

原うちをゆるぎぬきと
涼しとと海浜深しと入日

角 金鳳

髪はす小草にゆるぎぬき

鉄蕉

白雨は下狗英せん梢う那

同

西行を目を云ありぬき雪

幽也

五日 祇々日次の歌を

河養姫懐剣をぬき流る水

角

夏山之菴をえうけと二曲

曲水

持ふまきたまひと居るう暮

同

石山より

男水う一後藤をえん春の山

延安 中

六日 祇々日次の歌を

松の葉を青水に月にかはる

角

七日

京都川うへへ
抵宅金ふりやう

鉢ふりる人のきこひもみやう

同

冷暑一葉名敷くさるに縫梳

ト宅

鴈もかきゆきさるを此暑サレ

柴平

八日

母の日や又は出まふく瓜

角

花つきの中へ

母の母より逆源あうり憚の姿

僧

巳百

憶子

梨の果をまきるとし巳が実のおそ

越人

梨水

二月や海は柿の果をまきるとし

越人

九日

翁よりれきふは梨の味しとて又
はちふりまきるとはしとて
昭とてまきふをまきとて

犬山のぼりやあはれは秋涼とてあ

角

日の後や華ふりる瓜に二一面

巴山

あまのとき紅鳩あうり木平ま

同

暑もあうりあうり家此暑サレ

氷花

夕涼も似合ぬ僧まぬとてう

竹井

十日

曲水の旅宿は訪り
湖の水をあまひに

連やあまの表をまきとてあうり

角

せう草菴をまきとてあうり

あゝと云ふ細代に水魚を養て坐ん

箱

法華本門の心法

車下

非人

雨後の漏ち惠どもとの花の雨

麻のりさとしの句法結構
はるさしとれは我母の退去
中くは句をさしりる人翁也
茶止り こと成る人
すはるさとしの句をさしりる人翁也
記ぬる人

十一日

水の秋の風の地ぬる廟之事

角

十二日

夕暮師まじに風を誓うぬ

同

十三日

拜天王之御旅所

里のふれ宿官よりむ鼓式

角

十四日

蒲の穂や 幟を雇くおもてん

同

川はくち動く必身をも異なり
揺るこれありと至親の帯

地延 百里
及可

十五日

城入や 時をさしり土用丁

角

十六日

怖夢をさしり

切レ半ぬる人 蝶の 虫の 蛸

同

衣食住の三つは何もさしり

ゆるんゆき草を芽令ふに安んず
ゆき食後よく天を命を

山川

酸

跡る齒を食ふ老る酒り那

苦

蕨根地より生るの味を蕨の茎

其

井乃産の蛇を食ふに蔓いもど

辛

百草より蓼れ食ふに著

鹹

なつとく梅よりや次子の子

十七日

食ふとく久き重なるあゆみ

角

媛寡

蠹乃尊や干乃くぬき妹りみ

達曙

十八日

ゆきとく猫の昼寐に男の子

寒蟬

拍

拍や妻をえくきの人あふ

次のあはれ白不拍子の躍りね

角

笑種

京ふいふり

大夢れ柳魚のけむる條あふ

舟竹

蠅はうのちの秋の眠りあふ

巳百

仁あふるまをえくき木目か

仁あふるまをえくき木目か

はれつとく月此乃田まうとくまうは
狐とくねいふありしとくま
手は中より狐とくねいふありしとくま

あやしくきえぬるふあし
とくまはたし
元禄元年七月の事と云

十九日

月やそと澄みゆくあけ涼しく
紗乃現し螢つちん鳥羽山
何とて春たれと云すみ

角

省深

枳風

廿日

夕鳥守白き鶴垣根と云

角

砂色つるくあけい
銭あり

刺立れはむりあされや秋の風

曲水

難波江と云

康しといひ川角あけ涼の聲

路通

廿一日

市中乃ち夕涼いと
いふゆいといふ

秋鳴るうらな穀や夏井糸

角

佛めさくくんかうと云く蓮うね

付色

廿二日

綱農

焼源と云月々一畧一田刈

角

廿三日

煙雨村

夕をや洗ひをう土の色

同

ゆづるや炊く煙をつまそ

百里

魚の鰭白雨と云一町金川

遠水

廿四日

廿五日

廿六日

お中一團のゆきれあけいふ事

不奪百姓膏腴と云
文選のこととあり

百姓を去る油や 一夜ほ

木戸番を
あそび

蟬泣きけ一日啼く夜乃露

蚊乃声を悪し時を候ふ那

炭をきけ ぬきあふるあふ

つるきもぬきあふるあふ

常禱くくくくくくくく

角

同

同

由之

童次

賤水

仙化

廿七日

豊年

めづ味候日年を逢ふ瓜茄子

白雨乃雨さへ晴る 黄葉叶

廿八日

雨中

夕立より 獨活の葉を度と白

廿九日

初めく
法衣

風松ゆきや貝と出ぬと番

晦日

夏後 清師乃花れとら

物くき花火とらとら

木の下に黄とらとら

同

笑種

莫陵

七夕 著 辛酉 乙卯 乙卯 乙卯 乙卯

松風

心非心是

亦

定良

そめいにて答ふに 石菴

の松原より

鋤立

防風

素人其能龍之也源武
有書也慕尔也龍之也

七月朔日

父の如きも、人をもて
まじりの心持の中にあつて
きかぬ心をもつて、いふを
りあすまへに、おとこは、
しとしつゝを若くして感の
なりきりとありけり。

秋と風と

南

滑てく 院内井戸乃月
 葵乃渠を立目とせ 編みく

定良

相授
夢山
年
之
周
誠

幽也

敵のさのよさゝすれきふ

松風

右虎海 後乃足法

溪石

二

[illegible]

南

拭乃篋より一葉分

角

殊事とも云ふや桶の百合

龜翁

寐うふんを物とせ

遠水

そのかぎり夕日を挑む情じか

且水

元山とみとけりいふよま岩つて
卯花午乳母まういさ垣根に

全山
白辰村

三日 市隅

西側 灯籠まういさみのに

角

離婁之明

とみあじ免の毛並けり

荀深

不斬畜乎樊中

庭菴よりき次近きる

読大智度論

深きまういさみさ白蓮花

同

一念

艸の露をけりめうあぞ千は月

荀深

四日

五日

六日

星あひや物まういさ胸の中

角

七日

水糸を西望して

七夕や雲霞まういさ留まき

同

時あまうけ草や星代舞

素見

名のくぬ史婦世よあ天の川

仙化

蝙蝠の風まういさ糸

曲水

星あひやあハ一ツ

葱畑

里東

青女
星合や人老うと云 衣幾ツ
漢石

星合や人老うと云 衣幾ツ

當年と云ふ、電や云ふ
も、身身の縁と云ふ、
中や何と云ふ、れハ言フ

何くを七色あらん 星す
是吉

八日

三遷のわいふ、慣ひく
七、小あう、お姫さま
の、せ、れ、こ、月、あ、う、く
と、を、し、う、く

文月や、産る、文字と、母の恩

題、張氏、愚居

星合や、人老うと云、衣幾ツ

角
瓢瓜

夕顔や、半開、ハツ、鐘

瓢瓜

邸下、垢離や、かの上、お、抱、笑

訓女

石山、幻住、菴、へ、芭蕉、翁、く、り、く、
尚、伴、や、し、所、也、く、く、佛、
銅、を、ま、つ、く、を、く、く、

いつ、あ、う、て、藤、の、系、ま、け、佛、銅、は

里東

幻住、菴、山、上

木、啄、の、柱、を、つ、く、く、住、居、く、れ

曲水

山下、く、く、く、

物、持、く、小、松、は、海、く、る、け、く、れ、を

同

蟬、乃、き、り、氣、の、あ、や、ザン、ザ、源

全峯

鶉、と、つ、れ、持、銅、も、眠、る、夜、の、く、

氷花

石敲

亀足 千破

半夢 角

衆のふた廟一かき居るなり

自畫讀

いし書く果す志せに碑一た名
あふまらしあ中神ぞ御状

九日

生靈酒のしる祖文の部

一日 海邊成重

編書や朝暾志し居るなり又

十日

あふまらしあ中神ぞ御状
あふまらしあ中神ぞ御状

親とみえ佳才ありて蓮賣

聖合乃名一樹一を比丘尼所
彩鳥也命とく海 土 沙

十日

美女兼男 灯 名通して一は遠か

貞婦も我吐うたせぬ相撲の如

十三日

南越の其酒よりある
妙向のわ川より西に上
の壱井あると云ふなり

濁る事をなすなりと秋の雨

態憐れまの病吸情の事

風来くつれとをばあふまら

角 柵雪 同

土相のふ山さういふあま

山寺や人這うる花著うほ

仙化

十四日 方郭原

みそ萩や分限は足ゆ

角

草村より飯喰ともや妹の風

琴風

秋風や肉さへはしのぬきし

角

少轟れ虫けともうくの完

童次

玉川を我屋重名も心

琴風

玉まうりかこやせり鉤る帝機

後石

門並や穀挑野ハ盆の中

裴淵

秋風は保るる玉まほり

十五日 ときく

葛の紫れ赤いあけを恨る如

角

荀子其辭富而廉

白妙り夜の牡丹を風輕

揚水

孟子之文直而顯

白雲やちと山をみる

同

揚子之語簡而奥

木かきし軒の尾とてを架

同

十六日 陀羅尼品

銀を服る秤や暮る糸

角

亦三年の回愁

とつハる者かさ一 暮乃ち

仙化

亡親之日
孝養施餓鬼

百里

地獄 落能や火振鳴る水の色
餓鬼 子と殺る者老の門や 言打落
畜生 馬士も倒る外世く未乃落
修羅 过くふ切ちりしう家西血
人道 文し身と収へや 生身魂
天道 稲妻乃く川ふ為ふ 契う罪
声聞 秋風や梢く散る 憚る空
果覺 蓮乃安ん 風もものくくま

菩薩 濯ふハ母乃かづれる 生る度
佛

十七日 葬とある男の推つてきる

西瓜うハ奴乃鬆此流まきり
輪ふくく葉小み じしせの叶
筆木餅を文字又かある 灯籠
昼寐して夜をあてふ 此指観

十八日

つぼくとんそ 庭あり庭の萩
萩もきりし 回り 燈籠う那

角 探泉 東瓦 同 里東

すまひとく力く時童う事
半人の肩やぐらきり秋の雪
老僧をすくも所や过せり
いろとをきかぬ我と猿と
夏は身は降りしと時を味
さす樹なつりや大れつ
寺くは掃除をひらけ柳枝
誰あめと堂まゝの依りて
菟兔の紗箱すの氣崔う
妙ふと名をよむお披露

番組

文松
老
とめ
戦竹
車
亀
半
同
野
司
同
岩
蕭
山

三番三 沙とくくハ睡ゆる人華乃酒
高砂 松乃葉やさうぐ目出度つ雪
頼政 いそれく末摘まうる 菟
東北 東を北母をく経すむ時
紅葉狩 切きく太刀と火渡らん空の
三輪 泊瀬女ををくく 松
三井寺 うへ狂やうはあれ月
老松 雲梅やま帰 通はれ計の

十九日満百

その月ふ成きり 母の歌

角

我もと又もくひはせん秋の蟬
蟬乃もくひは虫も向れ千歌式

荀深
東吹

追加 四日五日のかいりりり

七月廿二日立秋三回忌をまじ
智恵所をとりとねひく墓誌
浅き世をなす念佛堂

三人乃夢りて各々秋を聲

角

同く

三と夢りて各々秋を聲

秋風

市中閑居

葉やもくひは人々竹梅子

角

閑興六哥仙

ゆく水や何より清き海苔の味

其角

叔乃芽立ちの堀江 柳橋

溪石

人色しをのり玉れききりて

夢風

檢狹成らん出らん此良

角

さす月と輝く四回乃ききりて

石

誤をすつる 扇をききりて

角

数珠や獨站念一居らん秋の雨

角

女如使の歩色半一 待

角

かき歌あもる方ふも讀まん

角

借鈔とてい 酒子ききりて

角

幸ひ世々八竜因の福宜の志がれ
 又その様よりそは甘柿
 執美義子親父 月老のけ
 転写り張翠のわうは秋
 ちりき 書り せうはく 雲の中
 其血あふふ一筋先芝
 我を事金拾ひふふ花の底
 二日の夜ふ来し 離町
 十 賢翁乃田今お撲をとりけり
 土器 掃ふ 掃破子のぬ
 市墓への道よりくくくくくく

石 角 石 角 石 角 石 角 石 角

妹よりおむあひや笑しに
 垢離坊より笑者告ぐる人の縁
 心よりおむくくかふん抱瘡
 我余の本卦より決はるん
 いでそはとうとふ勝修羅
 磯の月何就をうき事おを
 雄の渦さく 上福乃衣
 才起内と信よりみそ天降居
 す川はんやゆふは妙面
 老切をあふひく絶り軍して
 霜乃へ哀よりやん尻窠

石 角 石 角 石 角 石 角 石 角

それ偈の灯の光 ちりくや
ちりくや 遂をうり手 摩訶鉢
すり針や 魚の海を足踏して
着やあゝと 本曾の麻衣

四月
石山別住庵を
うりくや

郭公 背中 ちりくや 摩訶鉢
神 ちりくや 山をつつ ちりくや 摩訶鉢
お人の さく ちりくや ちりくや 摩訶鉢
急 ちりくや 味をちりくや ちりくや

風 角 石 風 曲 水 其 角 同 水

月と 隔をとりし お供を
年と 此 摩訶鉢 大 摩訶鉢
摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
子の 白と ちりくや 母の 摩訶鉢
摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
七ツ 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
ちりくや 摩訶鉢 二ツの ちりくや 摩訶鉢
ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢 ちりくや
町の 都と ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
町の ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
町の ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢
町の ちりくや 摩訶鉢 ちりくや 摩訶鉢

同 角 氷 角 水 角 水 角 水 角 水

いふ如家用にいづく焚
すれ人小酒買ふるをかし
さそふ月やほめく居る也
長き世は氣あふさるる嘆き
茶をさふ 藤中乃秋
け恋と兄の合點を侍中
まゐる 秋のまゐる 氣の毒
居士より小衣のほく 袖を
六浦の色も 曙乃 我
く火やくあ海より 標をさるひ上
さる日乃 案 具足くはる

角 水 同 角 水 角 水 角 水 角 水

何者乃ひさしし 家々の尿
のけりくく 富士の白雪
月影も鼻の先より 戒め
弦乃 糸をさる 藤胆
振袖乃 羽織に 上
りまゐる 伊を 年 の外
き居る 通の 夢と
あ中より 小判 糸
を別平より 糸を 糸
扇をさる 蝶の 糸

角 水 同 角 水 角 水 角 水 角 水

箱中付しき幸衡一
まのうろく千那真
体ひる印奥

竹えのちねはなれ柿草

珍々

昼親の情き振形る旅の只ねと
てしきし別後を向ていす必
しと結考一おしきしあふれね
角のころきしとねし油る案いふ
わんたてりあし次ききうてり
のこきききき

其角

筆とさし読多やめあき下原

増ふき読るちり北走しと

いふ解しきとねし月とて

蕭山
彫棠

ちりねるききり罟を看て外

り来ハ服治るきめし小ふしき

す裁形しと腹をきき

盗人と吾名きき人里のる

すし甲斐とあしぬ法読

筆やきとあしとねし村時由

紋足ききとねし提灯

あしとねしをききし思ひ出

早歌ききとあしききとねし

死きと人形しききとねし

角 山 同 棠 同 角 同 山 同 棠 同

呈錢

安房の海奉りきり汗拭 廊棠

そき

あゝ此海をく思ふ西の海 浦山

置幣ふけしおれを延ぶ 棠

六月十一日

小宅

あふきよ水乃移れし車傍

きし角

久立けし海 け乃勢ふ

棠

世の月をくこころに急切て

宅

結 世をくせ 年 年

茅薄 牛足く窓往くもく世

角

何くくくえり 雪を深き

下

ききふく窓つさよるりくきり

宅

凡 十分年 ひとく 盃

海

貧ゆふに來り猪はさけつん

下

世化よりふき海 幸人

宅

夜の雨焼食ニツあざくせ

角

泣くきりつとあつて福きま

下

下細乃結ひ目もき志き

宅

小使赤きあきりのあき海

角

おきりしきき物んときり

棠

月日より一酒む久人
 かへ姫久やと定ま花あり
 桃よりあやしくあたまなる堂
 ナ蟬乃巢いふあきさきもの工也
 二時責り 沙馬出り
 碎歌を誦さるかゝる 俳句集
 めるでかきくまの 俳句
 室川ふきくまの 俳句
 猶書より色 きりり判り
 四ツ五ツある 俳句
 人より買せしあきく 俳句

宅 角 市 宅 角 市 宅 角 市 宅 角 市

多分よりあきく 古那
 柄よりあきく 扇より
 秋の料ゆり 門より
 人よりあきく 犬
 灯よりあきく 寸 煩のは
 るきあきく 所より
 又きあきく 小 能く
 遠巢 寓巢より 小 能く
 甲斐文部より 新 春の月
 中よりあきく 細一より

宅 角 市 宅 角 市 宅 角 市 宅 角 市

七月十日 橋上吟

をのきけしおきてうけ花大船
ある物織を揺る まくあ
夕月小湯ふけをちまを漂ひく

七月十九日半時

招らきて坊主ありうりて相撲
秋も涼しき 登臺 炎
湯次めて廻り新湯を物候く
下より焼火をくみ月親
町の戸張水柱ふ買て轆る若
市を囲む 銭うき所

且水
浮萍
龜翁

其角

遠水

岩翁

角

水

翁

我方より古き佛張新し

家子仕ゆきふれきき妻

白知ふふ源は北^{ミカ}背をかきん

盲^{くら}表ふ 足ゆれ 赤髪

あふふ月ふきふ船の数

水施縁鬼あねねん 所沢

鯉切る小機りひきく秋の風

俣抄かき吹三里ある馬

赤年ふあふふと堆ゆきみ世

意ふかあふふ 奥ふふ友連

王城より結てすのふふふふ

角

水

翁

痛

水

翁

角

水

翁

角

水

稲葉の 葉をうもあふぬき
うまひより乳母の 無む 穂^こり
風をふく ぬき 妙味
暖簾をきこあふ けり
きりぬ 葉のむ けり
目くらむにふく ぬき
月よ 葉のむ ぬき
此度と ぬき
銅と ぬき
精をの ぬき
一藝 ぬき

角 箱 水 角 箱 水 角 箱 水 角 箱 水

をのつ ぬきの 藤入 ぬき
まふ ぬき
あふ ぬきの けり
砂 ぬき
雨 ぬき
物 ぬき
木の ぬき
尺 ぬき

水 箱 角 箱 水 箱 角 箱 水

偶興

秋風や ぬき
返り ぬき

右 箱 角 箱

葉をゆきむ石も形を壊す

志水

宝珠乃おかしなり

仙化

亦一途は旅あまたれおかしなり

百里

月をあまより 鹿のあまの

志とてゆきとてさ祭とて平座て

武士ふれぬ旅のあまなり

秤さへ算の案とてあまなり

いふは影 冬よりあまなり

むきくとてさ祭とてさ祭

あしちむ墨を押しし史

ちうけふとて男を押しし史

角化里角化

青屋があまなり

いつとけふ井の輪は水柱なり

當ちなり 足殿 少なり

十分の夢を見せん 花は紅

焼手あて 鹿心山く

釘かくり建立しあまなり

能の古より 眠るなり

旅すなり 鹿心山く

紐くをさす旅 秋風

新しき裡なりしなり

あまの瀬よりわたり

角化王角化里角化王角化

村昨乃喧嘩の時と云ふ
 心もなれど
 一と割と養を
 所も少形
 此の世に
 徳に
 月雲と丸を
 針主
 行か
 事
 地

花摘集

山田荀深跋

孝者德之基也。儒家有孝經，佛氏有思重
矣。母子之有親也，懷老牛舐犢之愛，沈斷
猿呌子之恩，猶羔有跪乳，鳥有反哺，況亦
於人乎。予茲武陵，晉其角元祿萬年之三
四月，佛生日，遇母公之諱日，偶詣石廟，嘆
感，潸然泣血，橫斜捻香，摘英挑一灯，咏一
驗，以供聖薦之追福。積日涉月，向冀換百
葉也。今幸慣摩耶報恩之結緣集一，與百

吟名曰花摘也。記其備者，皆是助餘
也。嗚呼，角子寄思風月，游心滑稽，花中轉
鸛唇，楓林敲鹿腸，遠追祇公之薰業，近汲
芭翁之支流矣。闔國許之成世之棟梁，噫
夫叔子有墮淚之碑，其角有花摘之集，和
漢雖易地，其機亦一也。予閱其集，感其情
而採毫於東武之旅寓。

元祿

庚午

歲上秋下旬

三年

俳諧錦繡綴

晋子も巻のういをえり
あゝい錦繡綴はあゝ是佛家
平華嚴阿含方等般若乃法經
あゝは法華經を説くあゝは
さゝは法華經を説くあゝは
もゝゝも亦もあゝは

元禄丁丑冬

江上隱士山松子序

風多ハ天地の氣とあるを
 天地乃嘘とあるを時面う那
 霄間や旁のけしは又海滔
 安れそを稲妻は結とあり
 鈴機より升流や夕片々
 殊る雪は言乃谷くおほりり
 十月や艸もえんゆる庭名隅
 垣根破るそれより升流かき
 殿はくり懸るくしけし
 鶴ののをもきや雪はく
 美濃より入る

湖春
 其角
 翁
 京
 去来
 正秀
 尚白
 素堂
 一笑
 文鱗

小信や方張養のん孤島
 初下向
 富士此山師とあるはす
 牧方の霜に
 馬より貪るそり持たれ昏
 妻かきわいせの家貴人そ誰
 亦るやつきのほそ梅のちれ
 くるの手に并の吃とせう
 くるの手に并の吃とせう
 嵐雪々画き
 贅のそみり

翁
 春
 其角
 尾西
 荷分
 曲水
 其角

下も此かゝる人々

翁

や弓矢あつゝるおれを

素堂

河野や終りひゝぬ花並

標子と心子

平田

つ川の村人は落りん白牡丹

李由

おもふふ落れ来ぬ目もあやう

西吟

腹のつゝ人はみえや池も能く

野水

あはれ背も濡る雪の落葉共

肅山

けうかゝ我々旅する

お鬼乃獨りしや秋もくれ

其角

お智の師は車座を志の児

其角

車もて花見とらんや

其角

あゝらぬぬあんのつゝやお様より

嵐

紙屑や所へてや

柴車

通もあはれ中よゆゝの途極

山川

尼もあつゝ女妻より

らみりあつゝ

花もるゝさゝや多乃ゝを者

すゝ

あはれはゝゝゝゝの核の

翁

とやゝゝゝゝゝゝゝゝ

佛もあゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

憶芭蕉翁

月華や沙路れち社跡ゆく
孫生半とみゆる果米
身乃巢も次飲の身なちひて
うらへやうに蟹の味し
上田をゆくへても苗の味や
あやうき水の中は宗川
あやうき先へかきあそび
蹠の節はあつるかうき
玉あそび御堂より下地あり
鳥子^{カラス}出家三條の音

其角 溪石 揚水 普船 仙化 角 石 水 船 化

糸雲をかきけりあきる雨乃木
懸籠のおびたふてる枝
小坊より花をたふさ月の友
町府よりあそび祭りの園
うらひ酒の庭は凍むん
るあそびと飢種を干ス
ひりこれ十夜のうちをきり
甲斐ありあそびを産む
おの奇棟はつるは柱柱
登附ふちる意乃是れ物
軒より金に金人より

角 石 水 船 化 角 石 水 船 化 角

苔の下まゝ隠れー墓

うへ山佛は僧乃こもー啼々
層々百首は春の表れ月
清正の船ともしつゝ已乃抜
あゝ龍神の形と東風を吹
揚貴妃の形をつゝあるゆゝ
癩疽のつゝあつゝ女々泪を
入る洗つゝ白く飯の米
志いゝ寒くあつゝあつゝ
亭主婦アゝゝ詠かんがひ
るゝゝゝ馬船あひ音

石 水 船 化 角 石 水 船 化 角 石

麻々々々この山あれ形ある
おゝを枝折の僧面々谷
目乃玉の出はるゝゝ見吹く
空死ー海狐の形
あつゝ浪高の形とつゝあ
あつゝれ口を焼くあつゝ
かりけゝゝゝあつゝ切艾
五つ々四つ々あつゝ鐘
御神雲又流流乃霞霞輝ー
かひさも龍とわいー女
あひゝゝゝあひつゝあひ

水 石 角 化 船 水 石 角 化 船 水

通口とめくかゝる湯の層
 いそがしく蕎麦うつ所化乃禰樹
 色はく秋風あゝぬ紫蘇の実
 都はる山はあはれのあゝるま
 才と破談すきあはれ月
 輪をとら花よこゝ紫の情也
 酔くちあゝる梅の下み
 春のあ三十川のやまに水す
 かめくまゝるる夜申乃言
 供名は宗むる神も所く
 碑よりたぬいゝるおねのま塚

鼎五

化 角 石 舩 化 角 石 舩 化 角 石 舩

あけはむむらうするは芥の香
 夢よううくわく嵐くく犬
 初こゝて鰻をいむる苞乃肉
 板みちいゝる酒もやゝ舟
 日盛きいとゝ雪冷のやうくへ
 細天井のそ人老数
 銅蓮の水す葉裂れおろく
 本乃葉は是妙なり干らん
 夕ゝに茶入はせゝる鼻臍
 吉よ精熱を特表をを
 一面より新のやれ表かりり

化 角 石 舩 化 角 石 舩 化 角 石 舩

世同丸は白髪つりひ結るく
同一文にかく伊勢の旅毛
かゝる盆のやゝる旅毛
上りくは膳や夕のの
一二三寢の景れふの目
花乃さうりは通る小娘
卿多つくは師あまめ旅毛
道祖の神さふなる陽炎
鳳釐とさうりは落る大和川
次なる武者の年を同る

角 石 水 舩 化 角 石 水 舩 化 角

名月は彼朗詠の
尾もすつりく招り
方々く富貴れあふ右左
土佐の歌仙もす
佛めて禪もす
新しめあふり食ふ
も療治は心一つを
ねまきもす
壁に鼻紙もす
あふいふもす
當日は位牌くり月乃終

石 水 舩 化 角 石 水 舩 化 角

蠶の鼓機此寄りしは
 辛味へんはうへにけりしは
 心をつむくはうへにけりしは
 出あへんはうへにけりしは
 ちへてはうへにけりしは
 為癒乃かへぬはうへにけりしは
 清サ細言花はうへにけりしは
 時人老難依集もあへんは
 白くはうへにけりしは
 をうへにけりしは
 くるはうへにけりしは

水 石 角 化 舩 水 石 角 化 舩 水

大計のわづらひは
 宿まきさめく
 癸酉八月廿九日
 少多崩心の悲
 起ふはうへにけりしは
 一鉢子蟬も木葉も
 脱うは
 世れは
 金へんは
 神へんは

化舩

またすゝきとある所の男が
あゝと云ふ平仲の歌
あゝと云ふとあるみきあゝと云ふ
四度と云ふはと云ふと云ふ
鄙人成算てと云ふといふのと
齊のうゑと云ふと云ふと云ふ
風と云ふと云ふと云ふと云ふ
後のあると云ふと云ふと云ふ
芋の根と云ふと云ふと云ふ
教生と云ふのけと云ふと云ふ
高分の園と云ふと云ふと云ふ

旅麻布とあると云ふと云ふ
何と云ふと云ふと云ふと云ふ
あゝと云ふと云ふと云ふと云ふ
秋と云ふと云ふと云ふと云ふ
牛のけと云ふと云ふと云ふ
秋と云ふと云ふと云ふと云ふ
佛壇と云ふと云ふと云ふと云ふ
二と云ふと云ふと云ふと云ふ

市の人なき所

入内れ此きれの四隅の所

行草鮓 二十四句

悲悲鳴

獨吟

其角

ちんちんく蝦まろく。涙のり

並そぬ鶴乃羽のりなり

春掃とよの旅人つひらん

おれおれ汁と焼物

と食めと世をとおる旅人

ゆきとくくはるのさな

気とつとく少後閑る秋の昏

神十一

世白く来るる旅人の

我るいそ人の内儀をほめ

湯豆腐のほれさめつと

夢枕を此痛やうとおひり

伏り人の醫師のきこり

炭者さぬ風土記のきつ

芋やうく似る城中の畑

りたる引板一なる叫ぶ猿

温泉入の通る山る此

花のやわらう調市と抱く

草花とくさる旅人の味

清溪や波木さり吹我るる

其角

臨川寺

風乃吹きて落きぬく秋の夜

去来

世々々乃のやの夜は

わひゝゝゝのきゝゝゝ

秋の夜を隔てての人の煙乃を

其角

大井里

冬枯のあけがたにそらん妻を

去来

のゝり

秋の夜を隔てての人の煙乃を

加生

加生の妻の心は

燈かゝる紙あり

其角

池上の吟

帆うけ舟ありや堅田此冬け

け月乃の夜は

曲水

遊園城寺

かゝる二井の仁王や冬木立

其角

芭蕉庵旧州

あゝゝゝもや

千那はけり父の古

堅因乃さへ

婆はさるる

湖と屋根を尺せんむりて飛

尚白 其角

より日初月月のけしきや村ちるま

蟹のかきうふ菜ちるやみさめさ

素葉

屋中やまふれ似合ぬふはのうみ

新月下の七日尚白亭

尚白

園りそくち待えり小ふが

加生

櫓うきふともき火乃節

其角

茶師の翁拙くりかきりて

次 越き代日や船路どのの 新の色

全

多根のありし 新かきまる

白

綿十三次

はる水のむらり 新の色をわく

生

亦

ひし河ねるお新より浦の雪

全

野の寸雪をいふこれ月

角

鈴のちりき町はる次

白

番通の入口は俳諧め

力ちる筆かき入る

かき定まるこれ

去来

野啼や弓矢をけり十鈴

又ほるぬさるる小刀

嵐雪

はるくし栗焼葉の名なり

其角

形をのする 龍骨車リウゴクルマの月 朱
 こころを 蠶イタゴも 蛾カガく 山あり 雪
 蠶イタゴは 蠶イタゴを 露ツルを ぬら 雪
 うけくも 影カゲを あつたる 龍骨石 朱
 まこと 龍リウを 入イる 龍リウを
 旅衣リョウイ まて 龍リウを 出デかて 雪
 田タ古 多タかり 里リの 麦刈 角
 誰タレうも 職シヨク立タテおく 雨アメの中 角
 平家ヘイカの 陣ジンを 笑ウツふ 浦人 角
 船フネか けと ちり くの 裾スズ糸 角
 畠ハタチの 中ナカは 十ジュウり 月ツキう 雪

錦十四

いさ 無ムり 取トルあ 老ロウお 獲 角
 え 糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 雪
 花ハナを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 角
 糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 雪
 荒アラ糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 角
 うけ づり 糸イトを 糸イトを 糸イトを 角
 よめ 糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 雪
 小コ糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 角
 味アジ糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 雪
 雪ユキ 糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 角
 八ハチ糸イトを 糸イトを 糸イトを 糸イトを 朱

熱のふきこけいしめりあり
 持金りれりされたる煙のや
 煙りもれり酒うさうとれ
 とふんとつひにさうに床とつ
 火爐が蹴り出すあひあき
 も形すゑれ限りとあきけり
 惜しうもつてもまはへさる
 形すゑれ限りのめしめり
 長びくべし結あきり
 花びりさるる事なほさうに
 柳あうくひ 爰終乃 舟・雪
 来、角、雪、来、角、雪

其角述

或師れ云利休の茶の湯すあひて事
 好むともかろふれあひのなるともを是に
 古し是も新しあひて目とわたりてあひ
 けりる利休さうく不興すも新古の目さ
 ちあき人よさるはさるを好むともかろふ
 ことく欠損^{カサバ}あひとも時うさるく茶の湯
 用ゆるとも好むともはさるるはさるへ
 物あきあひつるなりともありともや
 さのとも一白したるあきあき人い
 てれあきあき其席又あきあきは長

是の丸珍重なりと云ふあり目利やふし
き如きふしや亦或のちつりき所
席のちつりき時は更しく分派し
たり無き此句も是用之點者の心を
つりきふしにありぬきをわたり人の
前ふけふしありぬきをわたり人の
ちつりき用毎月の境新古此分別し
きふ高き身して自然此丸流あり
出されし句もいづるぬきはつりぬき
さゆき此奉りお目するの茶中より他
用いさる時も時きふしありぬき

茶中目の中此茶中哉 普船
こもあつりぬき身をつりぬき 其角
立つ年のけりぬき酒けりぬき 船
包み紙やる陽座のえ方 船
庭なり此梅ありぬき月の影 船
ちのきは鏝をやりぬき丸窓 角
あぐりぬき色紙の泥れりぬき 船
糸玉のあぐりぬき人の代昌 角
身なりぬきぬきありぬき能太ま 船
あぐりぬきぬきぬき日曜ぬき 角
潮煮も幸くぬきぬき鯛の味 船

舟玉をくつて礼のうけけん
 柄杓めも振もいもあまを水や
 北神の流るるおんうきふ
 市供の人をうきうきあがり
 いもあがりすの市鳥啼
 月をふ近に北海のあんどうと
 旅代ちをうきうきあがり
 此のうきあがりするれむうき
 二日すうのうきうきあがり
 安持佛のうきうきあがり
 常任のうきうきあがり

角 船 角 船 角 船 角 船 角 船 角 船 角 船 角 船

目病^{メヤク}とも門^{カド}を立^{タテ}てる物^{モノ}也
 ろろろろろろろ瘦犬^{ヤセイヌ}の乳^{チリ}
 山の井^イに石^{イシ}や落^{オチ}ちけ
 都^{ミヤコ}の白^{シロ}きふつらんのか
 振神代^{フネノヨ}刀^ヤのうろはあけ
 是^{コレ}をくさくさ思^{おも}ひ蓋^{フタ}
 波^{ナミ}の月^{ツキ}波^{ナミ}戸^ドに泊^{トモ}るまみり
 藤^{フジ}も所^{ところ}の種^{タネ}もむす式^{しき}
 稻刈^{いねかり}初尾^{はつお}をかくる要^{よう}此^{こゝ}松^{まつ}
 家^{いえ}くくつく武蔵^{ぶさう}の玉^{たま}府^ふ
 市人^{いちじん}の肩^{かた}又^{また}捧^{ほう}て置く懐^{ふとこ}も
 、角^{かく}、船^{ふね}、角^{かく}、船^{ふね}、角^{かく}、船^{ふね}

南風ある 横雨ある 海 船

嘆花はほろろく 平 塩 燐 角

ちこそさるる ぬ 新 冠 子 海 若

火葬の記

斤の赤黄のふたをく 綿衣

幸ひの物なり

忠度一 所ふかれ 火葬く 其角

名もききけり ちなり 代る 此

鼎の法をきき 破 綿衣 ち 蓋

ぞ我は似合 ち 破 綿衣 ち 蓋

さばき 簀 山 此 ち ち ち ち

わろろく 破 綿衣 ち 蓋
なり ち 破 綿衣 ち 蓋
是より ち 破 綿衣 ち 蓋

炭より 破 綿衣 ち 蓋 今

鬼女の面き 破 綿衣 ち 蓋

吉来より 角 あり ち 蓋

能の法は 破 綿衣 ち 蓋

一合此 鬼女 ち 蓋

國あり ち 蓋

よかり あり ち 蓋

うそけり あり ち 蓋

てしきりしつるまゝに

つゝ。無夢れども思ひやり

やゝ難儀とあるものゆゑ

のりぬ

夏家のまゝとてむねり

其角

断あけ目くし山白草の豆食

法達

暖手京を羽織とてく

角

繪うかく鏡又障子に

角

山一つはすしやうり夕方夜

角

小米はくしとては

角

孤舟もけつるや

角

綿汁丸

越起しとてあゝ

遠

出れまゝに

角

息流は少ゝの

遠

雨さしとて

角

古きれ

角

我々

角

朝れ

角

鞍

角

古條の

角

突條

角

道

道

数くせ釘かけける紙巻
 角 庭
 夜席の終る其後うし
 角 庭
 振袖其の電よりある揺ら
 角 庭
 うりぬ 經より尺八より
 角 庭
 松風より多のさあたる 斤
 角 庭
 まるきあけり 越より
 角 庭
 み哉呵る人きゆりしは
 角 庭
 初るきなす 又あのか
 角 庭
 文車やふいしはある ち
 角 庭
 るはより酒女 禁 制
 角 庭
 院月れうふはけふか
 角 庭

秋の調の草花 煙さる 角
 小使新おふも遠きうし
 角 庭
 尺の陰ともふはふの育
 角 庭
 其後よりふてあたる 爪
 角 庭
 白髪 角
 小及のちりしはあるみ
 角 庭
 覺範のちりしはあるみ
 角 庭
 奥 遠
 まれしうりし日中の終
 角 庭

立春

春も来ぬ南北 蒼き星乃
 角 庭
 乃 露沾
 風より二日の月れあ
 角 庭
 ちるの 荷兮

旅初

あつゝくし目をつらふも秋の丸

翁

まをれき雨からるるるるるるるるるる

一笑

武士のつらきも人あゝさう那

好春

鎌倉のつらき

お系やふもくくくく山はく

枳肌

る人や川はくあふれ様麻

全峰

加州あふ

くもれもやふ入るるるるるるるる

翁

川舟のふもくくくくくくくく

溪石

枯芦は水底のくすくすくすくす

苔翠

旅思

舞臺上

うつ乃山わくくくくくくくく

芦々

あふれや中くくくくくくくく

珍夕

曜やくくくくくくくくくくくく

其角

あふれやあふれやあふれやあふれや

其角

猫のまゝもくくくくくくくく

琴風

夕立やくくくくくくくくくく

本下

片々

嵐にてもくくくくくくくく

其角

百々やれはくくくくくくくく

肅山

くくくくくくくくくくくく

巴風

蜘蛛の尋常は死又枯れくく

其角

うゝ火れ南風さけやきりりす
二夏の國おねりりす

其角

うゝおねりり花さうゝ此ま

翁

明星悟心

お目さき師を八月此まきり

杉風

おれりり社務さうゝ流さるれ

尚白

尼のまれ尼まねるるおんか

彫棠

おねりりつみつみ

まれおねりりまねり

加生妻

我まねりり修さきりり夜の雪

其角奴

夢さきにけりりりるるまねり

長吉

一源二十二

山崎や修のさきあられりり

秋れりり肥さるる押さるる通りけり

まねりりさき二日さきあられりり

辞世

もえりり又清やきりりりりり

小僧も庭さきりりりりりりり

人さきりり維多利亞さきりりり

於深川棠素院

はるりりりりりりりりりり

おねりりりりりりりりりり

初鞋やうゝりりりりりりり

介我

かゝる舟あり船は多かり

其角

高き水持て蘇鉄の塩沢をす

にいつて何と云ふ又すなほ人

どもやうき世あつぬ

盛くくくくくくくくくく

はくくくくくくくくくく

造精神くくくくくくく

半さふれ巻出さるる園乃音

くくくくくくくくくく

ま肌くくくくくくくく

縁つくくくくくくくく

錦二十三

雪我角雪我角雪我角雪我角

花妙友聖天町やーのーん

浄瑠璃くくくくくく

かぢやす切くくくく

園衆くくくくくく

二三俵くくくくくく

くくくくくくくく

大寺北川幅くくくく

くくくくくくくく

此夷然くくくくくく

めめくくくくくく

くくくくくくくく

雪我角雪我角雪我角雪我角

第壘うれも老の碑
 ぞいふもみ替ふもあ大城
 ともはみふもぬきもす
 取ふや湯女は返りて表や
 狂詩の神は哲人の月
 香の香瓢覃の履かきふ
 田うみと鹿はぬきふ
 心敬の夢話ふ
 赤紫は片は寒さ光ゆる
 下市はふり蹴るも花さか
 約のり袴は鈴も春風

三
あふもめりて
角なりて男ありけり鹿の友
はくしつゝあきまの罌井ト垣
ふすゞたるまぬ雪の散る
あき帆抄りや晴の雲
水やうららかに流るる月のかげ
四ツ井吹吹く櫓の秋風
さかきぶ磨所おもむきの意
木立の月まじり何處へ金
犀川の底にもよるを造る
上戸ちかぢなる酒に夢みる
角、石、角、石、其角、

髪を児法師とをくたつて
 号ふを毎の物北の汗
 帳も着も品儼の和かくし
 鏡北田路の和ふれ夕
 手考の二百町坂は片の
 とりさ井の荒穀と齒
 能さ馬流花は月せく口唇さ
 何山崎の地下のあうみ
 汲うせくいと深うるさの
 美人あけも寐自まんとす
 三世ふれ信者とのれあうま

角、石、角、石、角、石、角、石、角

錦
 二十五

かいさあさ年と悔人
 系花やう海も深ぬああうい
 さうきはあふ松好ぬあうい
 生力あふ心座さにかさあうい
 感状うう月北あうい
 むる高鳴れあうい
 漕り無気安房の櫓方
 阿の尾あうい
 織の喜北いさうい
 ちう五壇もあうい
 合おあうい

角、石、角、石、角、石、角、石、角

角、石

肅山信德路通

十六

彫棠

糸物乃ううしお窓のうら
さほるころは好じい
阿比虹のまを免ふむ北山
月老れくく送り園の

山通 棠 粒

夜もやあみあみく
ううしお園あをのう
入海城そくくはるみまを
と相傳ふそ是使郎は阿比
面合さるる似たり
ううしおまねぬも片時も

其角 綱

錦二十七

鴨のみやうり鷹あふ火
北子臥ス枯葉のわが影
屋根膏うけく阿比くく
阿比くくはる北泊り二から
鯉のぐみ吐く月北うら
浮芽をとあさくく阿比川鳥
あみあみくくく阿比の紅
うらめくあさくくく相局
とりねく猫の尾をうら
あさくく大さかきくくく
ううしおのうらくくく阿比

山角 棠 山角 棠 山角

政所のかゝり
賜^カり候へるまじ年の内
冥きくい鞆休る物なりへ
字通きをさすへんの秋
現しきたる年より花の畠
苴^サの畑地まの徳と
春日新いよりわづは縄あそ
紙子のちさいと南とせん
うづめき門のを食もろぬく
北板のころ車押せうあ
今や梅さ然るは期^{ウミ}を見ふ

[illegible]

梅柳のまきあや枝お垣
小弓あや／＼村のまきあや

遊清水寺

人の世のまきあや日若寺林

其角

布袋の談

大座落 襦袢のゆ所

鈔繡綴上 甲



錦二十九

安政六

初冬

大座落

馬

